

Gno G-let

グノレット

vol.14

2014年10月発行

グノーブル 算数 × 数学講師座談会

「算数・数学の連携」で
より良い教育環境を

保護者座談会 2014

一人ひとりの成長を応援してくれる塾なので、
私たちもグノーブルを信じてお任せしていました。

グノーブル対談 高校生の受験対策

横軸(各科目の勉強バランス)と縦軸(スケジュール)を
広い視野で見渡そう!

グノーブルOB・OGインタビュー

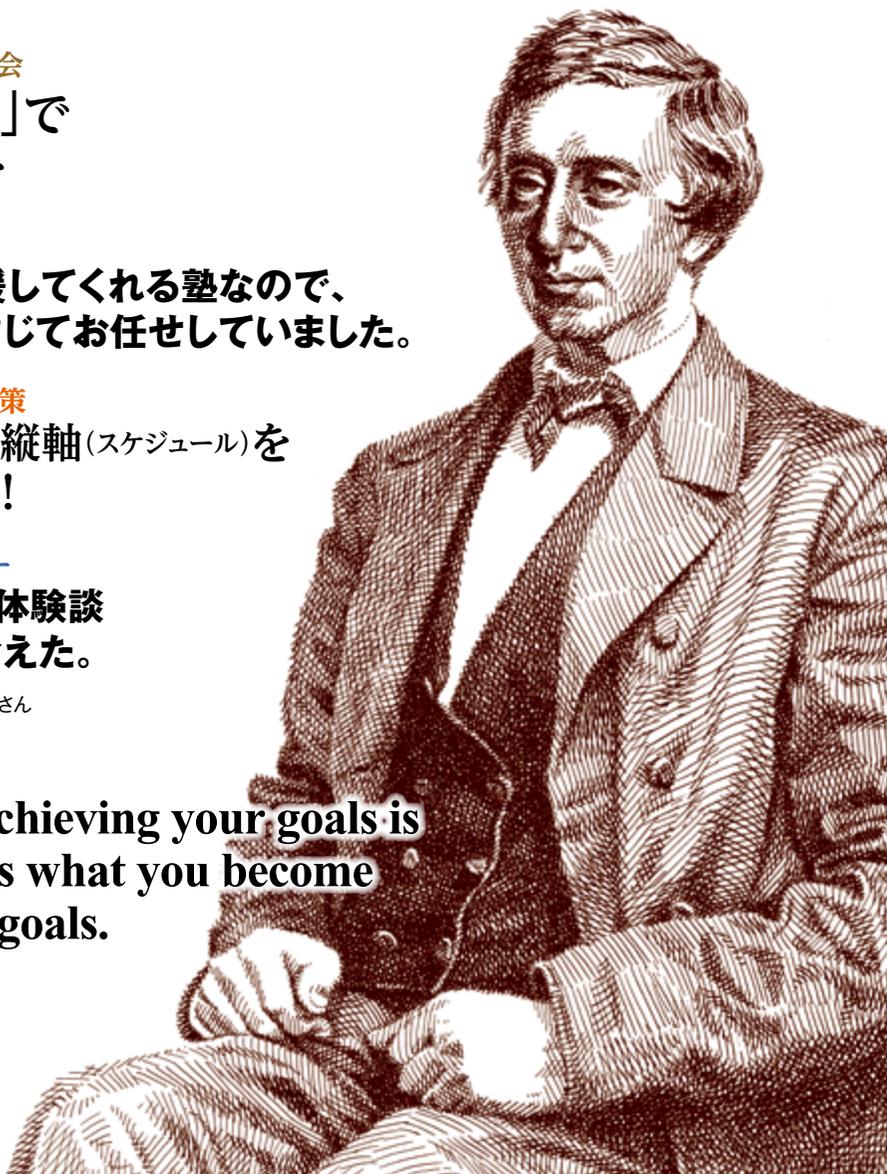
「FLYプログラム」参加体験談
世界に出て、自分と出会えた。

東京大学文科一類1年(駒場東邦出身) ^{くろき}黒木 あたるさん

東京大学文科一類1年(桜蔭出身) ^{やまだともこ}山田 智子さん

What you get by achieving your goals is
not as important as what you become
by achieving your goals.

目標を達成することで得るものは、
目標を達成することで成る
自分ほど大切ではない。



ヘンリー・デイヴィッド・ソロー

Henry David Thoreau (1817年7月12日～1862年5月6日)

アメリカの作家・思想家・博物学者。森の中に家を立て、精神性を重んずる簡素な生活を実践。その思想は、マハトマ・ガンディーのインド独立運動やマーティン・ルーサー・キング・ジュニア(キング牧師)の公民権運動、さらには現代の環境保護運動にも広く影響を与えたとされる。

グノーブル 算数×数学講師座談会

「算数・数学の連携」で より良い教育環境を



◆◆ 越川 将也 ◆◆

大学受験グノーブル 数学科

◆◆ 櫻田 邦浩 ◆◆

大学受験グノーブル 数学科

◆◆ 眞田 素 ◆◆

中学受験グノーブル 算数科

◆◆ 三浦 勇二 ◆◆

大学受験グノーブル 数学科
中学受験グノーブル 算数科

算数・数学を学ぶことが、ますます大切な時代になってきていると思います。複雑化する世の中の事象を捉えるには、さまざまな数字を扱う力が必要です。算数・数学で伸ばせる論理的な思考力、事象の本質を洞察する力、多角的な視点なども、世の中の多くの局面で役立つ力です。柔軟な発想や直観力は、将来のイノベーションを生む創造力を育みます。解法の方針がひらめいたときの喜びや、難問を自力で解き切ったときの達成感を味わうことは、次の課題に向かう意欲につながります。「数学は人生で役立つのか」という古くからの疑問があり、その疑問を投げかける人たちは、受験が終われば一生使わない単元や公式が数多く存在すると主張するでしょう。しかし、算数の勉強も、数学の勉強も、生徒の皆さんの可能性を広げ、「知の力」を鍛えていく上では大きな意味を持っています。

ところが、その勉強の道は決して平坦ではありません。算数との出会い、算数から数学への移行、高校数学への発展の過程で、生徒たちはいくつもの段差を乗り越えて

成長しなくてはなりません。良い学習環境や指導者に出会えなければ、途中でつまづき、挫折してしまうこともあり得ます。しかし、環境に恵まれれば、算数・数学を大好きな科目、得意科目にできるでしょう。

グノーブルでは、中学受験の算数、中学部の数学、大学受験の数学を指導する者同士が密に連携し、一貫した方向性のもと、生徒一人ひとりに眼差しを向け、一人ひとりが真の力を培える支援をしていきます。このような有機的な「算数・数学の連携」を謳う組織は、他にはまだ存在していないかもしれません。幸い、中学受験グノーブルには、経験豊かな算数の先生方が揃っています。大学受験グノーブルの数学科も、経験を積み重ね、指導体制がどんどん充実してきています。高い次元での「算数・数学の連携」をグノーブル・グループ内に確立して、広い視野に立つと同時に、長期的に生徒たちを支援していく、これまでにない環境を実現していきます。

グノーブル・グループ代表 中山伸幸

楽しいと思えると、考え深くなる

眞田 現在の中学受験では、きちんと演習を積んで、そこで身につけた力を応用・発展させながら答えを出す問題に加え、思考力を試す問題が増えています。立体を頭の中で想像する、紙を折って規則を考える、表に整理して規則や起こりうる場合の数を考えるなどといった問題です。日ごろから地道にコツコツ勉強して算数の基礎力や処理能力をつけることは大切な前提ですが、その場で柔軟に考えられることがますます大切になっています。中学受験が盛んになり始めた30年くらい前に見られたいわゆる難問奇問は、今ではすっかり影を潜めるようになりました。

三浦 中学受験で要求される知識の量は少なくありませんが、入学試験では単なる知識の多寡ではなく、頭の中にある知識をその場で上手に活用し、「知識を組み合わせると何ができるのか」、さらには「その先をどう考えるか」という点こそが問われるテストになっています。

たとえば筑波大学附属駒場中の問題には興味深い配慮があります。問題文中で題意を取り違えやすいポイントに、受験生へ注意を促す傍点や傍線がつけられているのです。学校側の意図する、「受験生に考えてほしいポイント」を外されると入学試験としての意味が弱まってしまいます。入学試験の場で、受験生の思考力を十分に見たいという学校側の思いが表れているのだと感じます。

櫻田 思考力を働かせるには基礎力が身につけている必要がありますが、生徒たちが頭を使うこと自体が楽しいと思える授業の工夫が大切です。中学生の指導において、特に1年生の頃は大学受験まで時間もありませんし、カリキュラム的にも少し余裕があるので、まずは生徒たちが数学を楽しく感じること、数学の世界に興味を持ってくれるように導くことを重視しています。

授業では、着眼点さえしっかりしていれば知識が少なくても解ける問題、たとえば、実際には高校で勉強するような内容でも、中学1年生が見方さえ分かれば解けるような問題、数学的な考え方が高められるような問題を考えてもらっています。

つい先日は、中1の授業で、絶対値がついた方程式を宿題にしました。絶対値を本格的に学ぶのは高校1年生ですが、生徒たちは一生懸命取り組みます。しかし、ただ解けて終わりではなく、その問題を通して独学では到達しにくい視点に気づけるように工夫しています。こういう経験を重ねることは、生徒たち自身の着眼点が養われていきます。それが発想力の豊かさにつながります。

この問題では方程式の解の位置を、グラフ(関数)を用いて表します。視覚化することで答えるべき位置、解の個数が一目で分かるという説明をします。中学1年生には少し難しい話にも関わらず、生徒たちは目を輝かせて話を聞いてくれます。そして、解の個数を変えるにはど

うしたらいいのかとか、どうしてこの解が存在しないのかとか、いろいろ考えるきっかけを与えていくと、皆が夢中に考えていきます。

私たちが問題選びをするときは、「こういうことを教えた」という思いがあります。その思いを伝えるために、「こんな見方もできるよね」ということを気づかせるようにします。視点が変わると見え方が変わったり、隠れているものが見えてきたりしますから、生徒たちも「なるほど!」という思いを感じ、楽しみながら考えるようになります。別の見方に気づくこと、考え続けることの積み重ねが、数学的思考の幅を広げ、抽象化する力を高めることにもつながります。

越川 大学入試についても、以前は、難問や奇問、計算量が莫大な問題が出題されていましたが、近年は、きちんと演習を積めば正解できる問題や、パッと問題を読んだときに解いたことがないと思える問題であっても、各単元の本質を理解し、他の単元とのつながりが分かっていると方針が立つ問題が多いと思います。

東京大学の文系入試を例に挙げれば、整数が題材になった問いや、図形分野の問いや、発想の柔軟さを問う良問が出題されます。たとえば、図形分野の問いは、出題形式がベクトルや座標平面だったとしても、意図的に初等幾何的な見方をすることによって簡単に糸口が見つかったりすることもあります。

高校数学において初等幾何を、深く学ぶことはほとんどありません。また、ベクトルなどの単元では、幾何的な考え方をせずに、数式化して計算で図形を解析するトレーニングを行います。しかし、実際の試験となれば、幾何的な見方で楽に解けるのであればそれで一向に構いません。アプローチの仕方に制限はないのです。

受験まで時間のある中学生の頃に、それこそ3日間くらいかけて、ようやく「分かった!」といったような経験を多く積んできた生徒の方が解法の引き出しが多く、問題解決能力の高さや視点の幅広さといった点において、アドバンテージがあるように思います。

眞田 算数の図形問題にも、自分で図形を動かしてみたり、等しいところを探してみたりと、柔軟な発想や多角的な視点の持ち方が大切になる場合があります。そういう発想や目を養うには、ある程度時間をかけて自分で糸口を見つける努力が欠かせません。そうした習慣は、図形問題に限らず、先々の勉強に必ず役立つはずで、結局、自分で発想したことではなければ、自分の力にはなりませんし、自分で気づいたときの喜びは次への意欲にもつながりますから、ぜひ大切にしたいと思います。

ただし、中学受験が近づいている場合には全体のバランスを考えることも大切です。中には、「自分にとって大事なのは、この問題が解けるかどうか」という状態になって、先に進めなくなっている生徒もいます。そういうときには、私たちが適切に助言したり導いたりするこ



眞田 素

カリキュラムや授業スタイルを考える際にも、いつも生徒たちのことを一番に念頭に置いていきます

とが必要になってきます。

三浦 越川先生の図形問題のご指摘は実に象徴的だと思います。私は高校生も教えていますが、ベクトルの技法がまだ身につけていない生徒の場合には、ベクトルの技法をしっかり指導をします。しかし、ベクトルの技法を身につけた上でなら、図形を図形として見る力を持っていることが発想の幅を広げることになります。そのためには、眞田先生のお話にもあったように、早い時期から、手を動かして考えてみるとか、視点を変えて見るといった習慣や、越川先生のおっしゃる、ときには3日間ぐらい考え続ける姿勢も大事です。それが、受験においても必ず役立ちますし、その先の「知の力」を活かすことにもつながると思います。

楽しむために必要な計算力

越川 算数でも同じだと思いますが、中学、高校で数学が得意な生徒は、正確な計算力、つまり、高い処理能力を持っています。それまでの過程が正しくても、経過の数値が違っていると先に進めなくなったり、そのまま進んでも正解には至れません。数学で点が取れる生徒は、やはり計算がきちり合っていますし、またそうした生徒は、自分で検算する術も持っています。計算力、処理能力がなくて結果が出せない生徒を多く見かけますが、一番もったいないパターンだと思います。基本中の基本ですが、数学において計算力があることは必須です。

櫻田 これまで私が教えてきた中で、数学オリンピックでメダルをとった生徒たちは全員、計算力、処理能力

の非常に高い生徒でした。計算が苦痛にならずに処理できる力をまず備えていて、その上で、考える力が大事なのだと思います。数学を楽しめるようになるためには計算力は欠かせません。考え方が分かっているのに計算ミスで間違えるのは本当にもったいないことだと思います。

その計算力を鍛える練習を授業の中にちょうどよく織り交ぜたり、計算確認テストを用意するなど、塾側の工夫が問われる部分だとも思います。結局、計算力を鍛えてあげられれば、生徒たちはますます数学を楽しめるようになるのですから。

眞田 計算は、正確さとスピードの両方が大事だと思います。正確さとスピードについては、よく保護者会でも話をさせていただきますが、6年生になって計算のスピードがないと問題をこなすことができません。ですから、4年生、5年生のうちに、まず計算のスピード、最終的な処理能力を鍛えることが大事です。保護者の方にもその点を応援していただきたいと考えています。

櫻田 ちなみに眞田先生は、スピードをつけるために、小学生にどのような指導をされていたりしゃるのですか？

眞田 私は、計算問題を10問縦に並べて、それを10回くらいやってもらっています。最初は5分くらいかかっていたものが、だんだん早くなって数十秒でできるようになります。答えを覚えてしまっているのが当然スピードが上がりますが、生徒たちは覚えていることを繰り返しても「つまらない」と考えますから、今度は、下の問題から解いてみようということになってきます。自分で工夫して問題に臨もうという発想に変わってくるのです。こうした積み重ねが計算力のスピードアップだけでなく、集中力の養成にもなり、自分で考える力を育むことにもつながります。

櫻田 中学1年や2年でも、因数分解やルートの計算は、とことんやった方がいいと思います。しかし、さすがに同じ問題を10回という発想はありませんでした(笑)。

眞田 算数の基礎トレーニングとして、5問の計算を行うプリントがあるのですが、難関中学コースの生徒などは、「計算問題なんかつまらない」というところもあるので、意地悪をして制限時間を1分に設定することもあります。もちろんこれは不可能なスピードですからできるわけではありません(笑)。ただ極端な速さを要求してみるというのも小学生には時として有効です。

三浦 小学生ですと案外そうした無茶振りに乗ってくることもありますしね(笑)。不可能な要求をかえって喜ぶような部分もあって、上手く活用すれば、緊張をほぐしたり、新たな集中力を生み出したりできます。

また、受験学年である小学6年生をイメージしますと、「正確さとスピードは、両立していて当たり前だよ」と、授業でも再三生徒に話しています。たとえば、外食をしたときに美味しければどれだけ待たされてもいいか。そんなことはないだろうし、逆に、早く料理が出てきても

グノーブルでは、生徒たちが自分で考えて解決する力をつけていくことを常に大切にしています



三浦 勇二

火が通っていないのでは満足できないだろうし。つまり、両立していて当たり前だと。比喻としてこうしたことを話します。

正確さとスピードは二律背反でなくて、両立できて当たり前です。ゆっくりでもいいから正確に、ということをおっしゃる言われたりすることがありますが、そんなことはありません。要求されるレベルが非常に高く、正確さも相当なスピードも必要だというのが中学受験の現実です。

心の内側が動き出す工夫

眞田 算数に限ったことではありませんが、生徒たちが「面白い!」「挑戦したい!」と思えるように問題を提示することは大切なことです。受験問題をトレンドという言葉で括ることにはいささか疑問もありますが、明らかに出題傾向が高いとされる問題を、生徒たちが興味を持てる良問にアレンジ直して、それを授業の中でワクワクできる展開にしていく工夫、これが教える側にとっては腕の見せどころのひとつです。ただ、「大事な問題だから」と生徒に与えても、生徒たちの心の内側が動き出さなければ効果は薄いのです。

三浦 生徒たちの心の内側が動き出す授業展開には、生徒たちをよく知っている必要があります。生徒たちの今の興味、今の実力に合ったものであることが前提です。中学受験の直前期には、当然、受験に必要な難しい問題もやらなくてははいけません、必要だからといって、まだその域に達していない生徒に、こちらが一方的に押し付けてしまったのでは、ただ「教わる」だけになってしま

い、算数好きになる契機を失ってしまいます。

また、授業時間は無限にあるわけではありませんが、その時間の中でも、自分でなんとか考えて答えを導き出せるような余地を残しておきたいと思っています。

櫻田 生徒たちの課題や実力を正確に把握することが前提というのは、中学生や高校生にもあてはまることです。生徒たちのことをよく知っているからこそ、実力のちょっと上の問題が扱えます。生徒たちが「もうちょっとで分かる、解ける」という、「あと一歩」の微妙なさじ加減は、教える側の力量の問題です。

生徒たちの手が止まってしまったときには、ヒントの与え方も大切になります。生徒たちが自分で「そうか!」と思えること、「自分で手を動かして考えた」と思えるような導き方が必要です。それをしないと考える力は身につけません。

授業の解説を聞いて、その時は「分かった!」と思っても、それが自分の力にはなっていないということも少なくありません。生徒の理解度を私たちがしっかり見極めて、繰り返し学ぶ機会を用意していくことも必要です。深い理解を必要とするものは、中学1年生で1回考え、中学2年生でまた1回勉強する、そして中学3年生で復習をしながら深く学ぶ、といった長いスパンでの流れをつくっておくと、生徒たちの中に伏線が張られていき、学ぶべき学年でしっかり身につくと実感しています。

越川 大学受験学年の場合には特に、解説を聞いて分かったと思える程度では、その思考の道筋を自分で再現できるレベルにはいきません。「なるほど」からさらに踏み込んで、「なぜこうするのか」という理屈が分かった上で勉強を進めることが大切です。

日々の授業では、単に正しい解法をなぞる勉強に終始しないよう、「こうする理屈」を説明することに力を入れています。生徒一人ひとりが、必然の発想として、やっていることの意味を意識できるようにするのが目標です。問題選びにも十分に配慮しています。授業中にはテーマの明確な問題や汎用性のある問題を扱い、宿題にする問題では、同じ発想で再現できるような問題を意図的に選んでいます。高校数学は、抽象的なことを多く扱うので、「なぜこうするのか分からない、だから解けない」となってしまうがちです。根本理解の徹底こそが鍵です。

眞田 算数においても、問題選びは大切です。優秀な生徒たちを担当しているついで、授業で扱う演習問題にも難しい問題ばかりを並べてしまいがちです。これでは、生徒によってはバツばかりつくことになります。ある程度の「できた感」「達成感」を得られないと、勉強に取り組む主体性のようなものが育まれません。

櫻田 やはり、達成感を味わった経験があるから、次に向かう勇気も出るし、できたときの喜びを知っている生徒は、ときには頭がジリジリしながらも粘れると思います。緩急がとても大事だと思います。「できた感」と「も

うちょっと感」、「自信がついた思い」と「悔しい気持ち」など、頭にも心にもいろんな経験を生徒たちに与えられる問題選びが理想かもしれません。

三浦 算数や数学の感動が味わえる問題も大切です。こちらが感じる算数的な面白さというのは、小学生にも同じレベルでちゃんと伝わるものです。ある問題の解法について、「すごい」とか「これは美しい」と私たち大人が感じるものは、生徒たちも同じように、ひよっとするともっと大きな感動を伴って実感できます。

授業中に、「僕はこの問題に感動しました」と話すことがあります。問題の解き方とは直接関係はないかもしれませんが、僕が美しいと感じた問題には、生徒にもその理由を話すようにしています。大事なことは、私たち教える側がどれだけ算数や数学を「面白い」と感じる感性を保ち続けられるか、また、そんな問題に巡り合えるように探究し続けているかだと思います。私たちのそういう感性も、生徒にはしっかり伝わっているのだと思います。

櫻田 自分が感動したり楽しんだりしていなければ、生徒たちに面白さを伝えることはできませんからね。むしろ、こちらが楽しいと思えることしか伝わらないのかもしれない。

眞田 教室にいるそれぞれの生徒たちが参加できる工夫も大事です。たとえば、速さの単元を学ぶときに、Aくんが歩いているところに、向こうから好意を寄せているB子さんがやって来たとか(笑)。生徒たちは「やだ〜！」などと言いながら笑いますが、そうした場面をときに織り交ぜていくだけでも、「いつ自分が登場するんだろう」と期待感を持って授業に臨めます。

ヒントの出し方も大事です。生徒たちの表情を見て、「これはちょっと手に負えないかな」と感じたときは、つぶやくようにヒントを言ってみたり、黒板に問題解決のちょっとした糸口を書いてあげたりと。ストレートにヒントを与えてしまうと「自分で解いた感」がなくなってしまいます。本当にちょっとした気づきを与えるようなものでなくてはなりません。

こうしたことが教室を盛り上げ、生徒たちが「面白い！」と感じられる授業に結びついていきますし、まさにそれがライブ授業の面白さ、楽しさなのです。

櫻田 生徒たちが教室の中に座って、ただ解説を聞いて、板書をノートに写して、ということだけの繰り返しでは、参加しているとは言えません。それでは主体的に考えることをしなくなり、頭が活発に動き出すこともありません。一方的に必要事項を伝達する授業はいくら解説が巧みであっても、いい授業とはいえません。面白い授業は生徒たちを能動的にし、生徒たちの顔を自然に輝かせるものです。

授業でよく生徒を当てて答えてもらいますが、それによって生徒たちも主体的に取り組めるからですし、教室にはほどよい緊張感が保てるからです。私たちと当てら



櫻田邦浩

グノーブルの文化ともいえる「楽しいライブ授業」は絶対に大切にしたい

れた生徒のやりとりから、他の生徒も刺激を受けたり学べたりすることがあります。思わぬ応答から予定外の展開も起きます。これもライブ授業だからこそです。

ある教育関係者の方が授業見学に来られたときに、「高校生が2時間以上にわたる授業で、ずっと集中しているのに驚きました」と言っていたことがありましたが、グノーブルの文化とも言える「楽しいライブ授業」は絶対に大切にしたいと思います。

越川 ただ、高校3年生になると大学受験が目と鼻の先なので、楽しいだけでなく、苦しいところもある、というのが率直な思いです(笑)。

それでも、ひとつ言えることは、算数や数学を楽しんでやってきた生徒には粘り強さがある、という点です。考えることを厭わない、とも言えます。これは明らかに、算数や数学に主体性を持って取り組んできた人の大きな能力だと思います。逆に、受験学年になっても、数学に苦手意識を持っている生徒の共通点は、「分からない」、「できない」という結論を出すのが早いことです。考える習慣が身につけている生徒は常に粘り強く考え、何としても自分の力で答えを出そうという気概がある。この差は非常に大きいと思います。

一人ひとりと向き合う

櫻田 大学受験グノーブルでは、発足時から一人ひとりと向き合う授業と添削を大切にできています。これは数学に限らず、全教科共通です。演習プリントや宿題を毎回添削することで、生徒たちのことをよく知り、クラ

スに欠けているものを感じ取り、それを授業に反映させていきます。関数の理解が浅いなどと思えば関数のプリントを多めに用意しようとか、計算力が弱いなど感じれば計算を少し多めにやろうとか。毎年同じことを同じようにやるのではなく、年度により、クラスにより、また個人により異なるウイークポイントを察知して、そこを強化していく授業を行っています。先に進むことも大事ですが、問題点をあやふやなままにしておくと、先に行っても必ず同じことでもつまづくことになりません。

越川 受験学年の夏以降の授業は、毎日が本番に向けたテスト演習をします。私たちは全員の答えを添削していきますが、そのときには、考え方のプロセスにまず注目して、クラス全体のウイークポイントを探っていきます。一方的に、正しい解法を伝えたとこで、生徒たちが自力でできるようになるとは限りません。生徒たちの答えを踏まえ、つまづきやすいポイントを押さえた解説を常に心掛けています。

個別の対応にも、添削は役立ちます。1つの問題の中にも大切なポイントがいくつかあるわけですが、入口でつまづく生徒もいれば、8割くらい進んで詰まってしまう生徒もいます。つまづいたところがその生徒にとって、最も学ぶべきポイントです。一人ひとりに対して、そのつまづきを解消するようなコメントを残すようにしています。

それに加えて、答案の書き方も指導していきます。答案は、紙の上で行うプレゼンテーションです。言葉や数式、図の使い方が適切でなければ、明快で説得力のあるプレゼンには行えません。私たちは、生徒たちがしっかりとした答案を書けるところまで個別に対応していきます。

眞田 生徒たちが自力でできるようになるという点は、絶対に忘れてはいけないことですね。そのために、一般に行われているカリキュラムを組み替えることも行っています。たとえば、4年生の場合、普通の進度では、平面図形の性質を2回ほどやって、次におよその数に進み、次には文章問題へと、表面的な理解ができれば次の単元に進む傾向があります。

グノーブルの場合は、同じ単元をまとめてやり続けるという、思い切ったこともやります。平面図形なら、平面図形の性質、平行四辺形や台形とはどんなものかの理解、角度や面積についての習熟など、同じ単元を続けていくのです。

1つの単元を続けたら生徒は飽きるのではないかと心配はいりません。徹底的に理解を深めていくにつれ、生徒たちは自信も深めていきます。次々に新しい単元に進む一般のカリキュラムよりも効果が上がることは、生徒たちと向き合ってきた経験から分かっています。

三浦 中学受験の場合は、生徒たちとの関係ももちろんとても大切ですが、保護者の方々との関係も大切です。本当の意味で生徒たちの実力がつくカリキュラムや授業スタイルを真剣に考え抜いていなければ、保護者の方か

小学生から中学生、高校生まで先生同士が一貫して見ていけるのは非常に大きなメリットです



越川将也

らの信頼をいただけません。また、お父様やお母様に「いい塾ね」と言っていただけの環境であれば、生徒たちも安心してのびのびと勉強ができます。

眞田 カリキュラムや授業スタイルを考える際にも、いつも生徒たちのことを一番に念頭に置いています。少人数で行う集団授業は、まさに私たちが生徒一人ひとりに向き合う場です。最近では、オンラインで授業を行う塾もありますが、私の考えとしては、息遣いの感じられない、巻き戻しのできる映像授業と、生徒と先生が向き合う授業では、生徒たちの頭の働き方にも、気持ちの動き方にも、大きな違いがあると思います。

三浦 いわゆるライブ感とでも言いましょうか。先生が持っているパッションのようなものが伝わるか伝わらないかは大きな違いです。事実、そうしたことを多くの生徒は感じているし、それが、やる気や集中力につながったり、理解力につながったりしています。

櫻田 集団授業の良さは切磋琢磨できる部分にもあると思います。私が教える生徒の中に、同じクラスの中にライバルを決めている生徒がいます。計算ならこの子が早い、場合の数ならこの子ができると、彼は競う相手を決めているのです。そのような意識も、教室で生徒同士が顔を合わせているからこそ生まれるものです。

私たち教える側は、問題につまづいて戸惑っている生徒へのフォローにも配慮する必要があります。授業中、明らかに質問するタイミングを失っている生徒に気づくことがあります。質問する勇気のない生徒もいます。そんな場合はこちらから声をかけていくことが必要です。

そうした目配りも、生徒の表情が見えている環境だからできるのです。

また、これは数学の勉強とは直接的な関係はありませんが、最近是人と人の触れ合いのようなものが希薄になってきているように思います。生徒たちと先生、生徒同士の結びつきが感じられるクラス作り、眞田先生がおっしゃる息遣いの感じられる授業はこれからも大切にしていきたいと思います。

越川 やはりライバルがいるというのは大きいと思います。高3後期の授業でも、いい答案があると、それをクラスの皆に紹介しています。同じ年齢の仲間の発想はとてもいい刺激になるようです。

小中高の一貫教育で生まれるよい連携

越川 どの単元でも楽しんで取り組むことが力をつける基本だと思います。中学の時に、図形問題を楽しむ土台ができている生徒、親しんでいる生徒は、それが高校数学でも大きな力になってくる。そうしたことを小学生から中学生、高校生という大きな流れの中で、先生同士が情報の共有を行いながら一貫して見ていけるというのは、生徒にとっても、また、私たち教える側にとっても、非常に大きなメリットだと思います。

櫻田 算数から大学受験の数学までは、とても長い道のりです。生徒たちが、いくつものハードルをスムーズに通過できるように、そして次の世界に大きく羽ばたけるように導くことが私たちの役割です。中学受験を目指して算数を学んできた生徒たちが、何をどのように勉強してきたかなどの情報を共有できた上で中学以降の指導ができるのは、大きなメリットだと思います。

眞田 小学生の授業でも、中学生、高校生の授業でも、担当するもの同士が自由に見学できるチャンスがあることは連携の大きなメリットです。たとえば算数担当者の場合、今まで以上に具体的に中学進学後のことを考えて生徒指導にあたれます。

また、中学受験のために通っていた塾を終了して、新たな塾探しをするというのはなかなか大変なことです。それは、中学受験の塾に満足していた場合、なおのことです。そうした意味でも、共通の文化を持った、同じ空気を感じられる塾があるというのは大きな安心感にもつながるはずです。この点も小中高の一貫教育を行う上で大きなポイントになります。

三浦 中学受験が終わっても、1週間くらいすると自分たちから「塾に行きたい」と言い始める生徒はたくさんいます。同じ方針、同じ文化を持ったグループの中に、中学生、高校生が学ぶ信頼できる塾が存在しているというのは、生徒や保護者の方々にとっては大きな安心材料です。

また、実際の授業の中でも、1月、2月はこういう授業をやっているけれど、この先中学に行って、春や夏にはこういう授業をやる予定だ、あるいは高校に行ったら

こういうことをやる予定だ、ということが事前に把握できていれば、私たちも「今、何を教えるべきか」を整理できます。

眞田 同じ看板のもとに中学受験から大学受験まで併存する塾や予備校は他にもありますが、積極的な連携を行って、より良い環境をつくっていくようにしているのはグノーブルが初めてだと思います。中学受験を終えた生徒たちに、気持ちよく「大学受験もグノーブル」と言えると思うとうれしいですし、より良い小中高の一貫教育ができるように力を尽くしていきたいと考えています。

中学受験、大学受験の指導者として

三浦 グノーブルでは、生徒たちが自分で考えて解決する力をつけていくことを常に大切にしていますが、中学受験指導の場合、それは小さな一歩から始まると思いま



す。最初は、「答え合わせをしただけ」という段階です。正解だというだけで1つの感動です。それをきっかけに、だんだん難しい問題に挑戦して、あきらめずにがんばれるようになっていけばいいのです。少し難しい問題にかじりついて「解けた！」という経験ができれば、感動はより大きくなります。そのうちに、解けなくて頭がジリジリする感じでさえ楽しいと思えるようになります。

こうやって生徒たちがたくましくなっていく中で、私たちは、どんな問題を与えていくのか、教室の雰囲気はどうか、といったことにいつも気を配っています。生徒たちの成長は何よりもうれしいことですから、私たちも一生懸命手伝いたいと思います。

眞田 グノーブルに通う生徒たちは、普通の小学生が経験する以上のことに触れています。頭をひねったり、手

を動かしたり、いろいろな角度から見てみたりしながら、それでも分からない苦労も多く経験するでしょうが、解き方に気づいたときのドキドキ感も、達成感も人一倍経験するはずです。「もっといい法則があるはず」、「もっといい調べ方があるに違いない」と没頭する生徒もたくさんいます。生徒たちは、算数・数学の森を探索しているようなものです。少し大げさな表現になりますが、この森は、数千年の間、人類がさまざまな発見をして興奮を味わってきた森ですから、探検は面白いに決まっています。

櫻田 中学受験を最終ゴールにして、正解を出すトレーニングに終始したのでは、合格という目標を達成した瞬間に力が抜けてしまうかもしれません。でも、「算数は楽しい！」という手応えを持った生徒たちは、数学にも新しい発見の興奮があるんじゃないかと期待して中学部に来てくれると思います。私たちも、その期待を上回る

環境を提供していけるようにがんばります。

小学校のときに算数が得意ではなかった生徒たちも、安心して来てくださいと言っておきたいと思います。これまでも、中学生になってから数学がどんどん好きになった生徒はたくさんいます。生徒たちの個性はさまざまですから、小学生のときに算数の楽しさに目覚めていなくても、きっかけと環境があれば数学を得意科目にできるのです。

越川 中学受験も大学受験もゴールではないという考え方は、基本的にはその通りだと思います。しかし、その一方で、「それでも数学は嫌いだ」という生徒たちにも役立ちたいとも思っています。人生の通過点である大学受験を、生徒たちがなるべくスムーズに越えていけるようにするのも私たちの大きな役割です。

眞田 生徒が自分で考える姿勢を見守っていくことは、中学受験の場合には特に忘れてはならないことだと思います。ときに、「この問題は教わったことがない」と言う生徒がいます。思考が止まってしまうのは初めのうちは仕方ないことです。そのときに私たちがどう導けるかです。工夫の大切さと言いますか、生徒たちが持っている知識を組み合わせて方次第でまだまだ力を発揮できる、さらに考えを進められる、そう本人たちが気づけるように導けるか、ということです。

変化の激しい現代には、「知識は使い方次第で応用が利く」とか、「知識の組み合わせ方が新しい発想につながる」とか、小学生の頃から経験上知っているというのは大切です。その経験をうまく促す環境を作っていくことも私たちの仕事です。

三浦 算数や数学に限らず、何かのテーマについて議論する時に、西洋の人たちは、意見の裏付けや理由をすぐに求めてきます。日本人としてみると、「意地の悪いことを言うな」と思うこともあります。もちろん彼らは意地悪をしているわけではありません。こうした議論への耐性は、論理性が求められる算数や数学の学習を通して培えると思います。実際、大学受験の数学では、かなり高度な論理性が要求されています。

算数や数学で身につけられる発想力や独創性も、世界的に見ても非常に高いレベルにあると思います。

越川 大学に国際競争力が求められる中で、数学の受験問題も正しい方向に推移してきているように感じます。レベルにおいても高度です。1つの問題の中に考えることがたくさん出てきます。問題文を読んで、条件を全て把握する、目標は何かをしっかりと捉える、その上で論理的に考えていく、といったことが要求されます。発想力も必要です。ある部分のことだけ考えていけばいいわけではなく、柔軟な発想や、いろんなことを同時に考える過程を経て、やっと1つの答えに辿り着くわけです。よく、「人生の問題には正解がないので、正解が1つの受験勉強は役に立たない」という批判もありますが、思考の訓練としては、数学はかなり優れているのではないのでしょうか。

櫻田 新しい時代に即した指導を念頭に置く一方で、どういう姿勢で日々の授業を行っているのか、研鑽を常にしているのか、といった自分たちの足元を見つめていくことも大切です。中学受験や大学受験の指導という条件のもとで、生徒たちの力を伸ばすこともできれば、伸ばし損ねることもあり得ます。将来に役立つ力を生徒たちが手にしていく援助もできれば、スポイルしてしまうこともあります。

自分の足元を見つめ直すという意味でも、「算数・数学の連携」はいいきっかけになります。ついつい私たちは自分の経験だけを基準にしがちですが、これからは、算数科の先生方と数学科の私たちの知恵と経験を束ねて、研鑽し合って成長していきたいと思っています。

一人ひとりの成長を応援してくれる塾なので、 私たちがグノーブルを信じてお任せしていました。

ご出席いただいたお母さま：飯野昌美さま 仙石由紀子さま 林 佐知さま

座談会の直前、「今年の東大は掲示板での合格発表がなかったので少し残念でした。でもそれは、子どもが合格できたから言えることですね」と話されたお母さまがいらっしゃいました。試練を乗り越えて成長していくお子さんを一番近くで見守られてきたお母さまの言葉として、特に印象に残りました。

今年度の保護者座談会には、「東大合格特集号」(Gno-let vol.13)にご登場いただいた飯野聖樹さん(文Ⅲ・学芸大附属出身)、仙石宇さん(理Ⅰ・麻布出身)、林真子さん(文Ⅰ・桜蔭出身)のお母さま方にお集まりいただきました。今年もまた、「なるほど」と、深く心に響くお話を頂戴しました。(取材・文 吉村高廣)

東大に入学して

飯野：テニスのサークルに入り、テニス漬けの毎日を送っています。朝も早起きして朝練に行っていますし、今はとにかくテニスに夢中です。たまに家にいるかと思うと、課題に追われて顔色が変わっています(笑)。

仙石：意外、と言ったらおかしいかもしれませんが、東大生って仲がいいんだなと思いました。私はもっと個の集団かと思っていたんです。でも、クラス内でとても仲良く協力し合っているようで楽しそうに過ごしています。勉強の課題も少なくないようで、高校の時よりむしろ机に向かう時間は増えているように思います。

林：娘は入学してから、「大学生ってこんなに忙しいんだ」と言っています。文系、理系を問わずいろんな科目を履

修していますし、アカペラサークルに入って合宿に行ったり発表会に出たり、それに加えて勉強の延長のようなサークルにも参加していて、毎日「忙しい」と言いますが、結構充実して過ごしているようです。

受験期の様子

飯野：息子は反抗期らしいものはありませんでしたが、受験期は少しとげとげしかったり、イライラしている様子が見受けられました。特にセンターが終わってから二次試験までの間はそれが顕著でした。

親としては、そんな様子を見守りながら、「心配なことがあればなんでも受け止めるよ」という気持ちでいましたが、私に相談する前に、グノーブルの先生方に相談をして解決していただいたり、不安を取り除いていただいたりしていたようで、それが大きかったと思います。

昨年まで長男*もグノーブルでお世話になっていましたが、長男の方は小さい頃から優等生タイプで手がからない子だったんです。私も安心して、「このまま東大に合格するんだろうな」と思っていたんですが、高3になって初めて悩みを抱えるようになりました。相当なプレッシャーがあったんでしょうね。そんな時にも、グノーブルには楽しく通っていましたし、先生方に話を聞いていただいたり励ましていただいたりして受験を乗り越えました。兄弟ともども、グノーブルには大変お世話になりました。

*飯野隼平さん(理Ⅰ2年・浅野出身 Gno-let vol.11にご登場いただいています)

仙石：以前から物事には主体的に取り組む子でしたが、大学受験に

向かうときにもそうでした。受験期にも、本人は成績のことや勉強のことは口にしませんでしたし、私も一切聞きませんでした。うちは放し飼い状態でしたので(笑)。

麻布中学の入学式で校長先生が、「ジャングルに放り込んだと思ってください。家に帰ってきたらエサと寝床があればいい、彼らは勝手に生きていく術を見つめますからどうぞ放し飼いにしてください」とおっしゃられたんです。自主自立、自由闊達というのが麻布のモットーで、それがいいなと思い息子を入れましたので、この「ジャングルに放り込んだと思え」という言葉にも共感して実践してきたつもりです。好きなことをやり続けた5年間で、勉強に向かったのは6年目だったので、よく間に合ったなと思っています。結果を出せたことで、また一つ彼の自信になったんじゃないでしょうか。

林：娘の場合、何においても、「どうしてこれをするのか」とか、「何のためにやるんだろう」ということが腑に落ちないと先に進めないところがあって、大学受験に関しても、「どんな意義があるのか」「自分が大学でしたいことは何なのか」ということに、納得できるものを探す日々がしばらく続いていたようです。文系、理系を選ばなくてはいけないということにも抵抗があった様子で、それで、今でも大学では幅広い科目を履修しているのだと思います。

娘がグノーブルのことが大好きだったのも、受験勉強

ということを前面に押し出すことのない塾だったからだと思います。学ぶことや教養を身につけることがどれだけ面白いかというのを、グノーブルの先生方から感じ取って、それでグノーブルに傾倒していったように思います。あれだけ「なぜ受験勉強をするのか」と言いながらも、グノーブルの勉強だけは常に楽しく続けていたわけですから、彼女にとってはグノーブルは納得して学べる場だったのだと思います。

母親としてのサポート

飯野：朝起こしたり、ご飯を用意したり、基本的なことしかやっていませんが、息子のスケジュールを乱さないように気を遣っていました。塾から帰ったらすぐにご飯を食べたいとか、お風呂も沸かしておいてほしいとか、そういう要望にしっかり応えていました。

男の子ですからあまり母親に悩みを話してこないのですが、不安な気持ちをボロリともらすこともありましたが、そんな時は、「浪人したっていいし、地方に行くのだったら自分で考えたことなら私は全部受け止めるから」と言ったことがあります。友だちの中にいるとわりと飄々としているところがある子ですが、いろいろ悩みもあったみたいで、「ちょっと話を聞いて」と言われたこともありました。本人の気が済むまで話を聞いていました。

仙石：「息子の邪魔をしないように」というのが、私の心掛けでした。たとえばお弁当の量一つとっても、「もっと食べた方がいいのに」と私が思っても、「食べると眠くなるから」と言われれば、言われた通りに量を減らすとか、息子はリビングを占拠して勉強していたので、息子が勉強している時に主人が帰ってきたら、主人には隅っこの方で食事をしてもらったりとか(笑)。あと、家中にいろんな教材が散在していて「まいったな」と思っても、あえ



飯野 昌美さま
飯野 聖樹さんのお母さま
東大文科三類(学芸大附属出身)



仙石 由紀子さま
仙石 宇さんのお母さま
東大理科一類(麻布出身)



仙石 由紀子さま
仙石 宇さんのお母さま
東大理科一類(麻布出身)



林 佐知さま
林 真子さんのお母さま
東大文科一類(桜蔭出身)

※記事中敬称略

て何も言わず1ミリも動かさないなどといったことです。息子が頑張っているのなら、多少隅に追いやられても良しとしようといったところでしょうか。ただ、振り返ってみれば、私もそういうことを楽しんでたという思いがありますね。

麻布に入ってからの5年間でいろんな方面に徹底して打ち込んできた姿を見ていたので、最後の1年は勉強に打ち込むだろうというのは信頼していました。センター試験の2日目が終わって帰ってきたときに「ダメだったかもしれない」と呟いたことがあって、その時だけです。不安そうな彼を見たのは、1日目は国語の源氏物語でやられていたので、2日目の理科のときにはプレッシャーで手の震えが止まらなくなってしまったのだそうです。もともと受験勉強を本格的に始めた時期が遅かったのですから、「浪人は折り込み済みでしょ？」と応えましたけど。



林: 娘は私にあまり要望をしてこない子でしたので、私の方でもつい娘が受験生なのを忘れて、自分の相談を娘にしてしまったこともありました。話は聞いてくれたんですけど、「ええ、でもママね、私も一応受験生なのよね」と(笑)。

娘の方から、自分が受験生だからという姿を見せることがありませんでしたから、娘が部屋に入っているときには、存在自体を忘れかけることすらありました。下に息子がおりますが、息子も「受験生がいると家族が気がつかってキリキリした雰囲気になるというけど、お姉ちゃんには感謝だね。こうしてテレビ観ながら笑ってられるんだから」などと言っていました。

そういう娘にはめずらしく、センター試験が終わって帰ってきたときに、「二度とこの試験は受けたくない」と言っていたんです。その言葉で初めて、娘がどれほどプレッシャーを抱えていたかを知りました。娘の思いに無頓着だった自分を反省もさせられました。

仙石: これは推測なんですけど、学校の友だちや仲間は、受験ということになれば全員がライバルなのですから、受験期の子どもたちは学校でもかなりのプレッシャーを感じているかもしれません。その時期にライバルではな

い家族の存在は大きいと思います。

飯野: 学芸も東大を受ける生徒さんが多いので、お互いに励まし合いながらも、内心では「オレだけ落ちるわけにはいかない」と考えていたと思います。

林: 本当にそうですね。学校の先生から「あなたは大丈夫」と言っていたりすることも、逆に緊張につながることもあるかもしれません。私は娘の気持ちにずっと気づいてあげられませんでした。家族の存在は確かに大切なのだと思います。

母親の仕事、父親との接点

林: 私は仕事をしておりまして家に帰るのも遅く、普段はどうしても娘の世話もあまり焼けなかったのですが、センターと二次試験の前夜は「家にいてくれる？」と言われてましたので、その日は家にいるようにしました。親に対してめったに要求しない子ですので、その時ばかりは「はい！かしこまりました」という感じでした(笑)。

仙石: 受験生だからといって、あえて仕事のスケジュールを工面してまで面倒をみるようなことは私もしていませんでした。息子の場合、もともとそういう家で育ったからこそ自立が早かったとも思います。

飯野: 仕事をしていた方が私の精神衛生上良い場合もありました。たとえば試験の日などはずっと気になっていきますから、家にいればネットで問題を見たりしながら気が済むと思うんです(笑)。

子どもがまだ小さくて中学受験くらいなら、親がもっと関わられることもあったと思いますが、大学受験になると、「何を勉強してるの?」「どこまで進んでいるの?」とも聞けませんね。母親が仕事をしているいないにかかわらず、関わられること自体が少なくなっていくのだと思います。

林: 要求もされませんよね。

飯野: ほんとですよ(笑)。また、うちの場合は、主人が子どもの教育に関わることはほとんどありませんでした。子どもが父親に相談することもありませんでした。私も、お金が必要ときだけ、「塾の月謝の引き落としがあるからよろしくね」と声をかけるぐらいでした。それでも多少は心配していたのか、センター試験が終わって、「なんか言ってきた?」と、主人から私に聞いてきたことはありましたが、基本はノータッチ。

子どもたちも私に言われるのは仕方がないと思っているのですが、父親に何か言われれば反発したかもしれません。父親はどんと構えてくれていてよかったのかなと思います(笑)。

仙石: うちの息子は父親を尊敬しているところがありました。ずっと考えていた数学の問題がどうしても解けない時には主人に相談してみたり、ときどき二人で楽しそうにやっていました。お正月を過ぎると、難しい問題の

答えを息子の方が先に出せることもあったみたいで、主人も、息子と一緒に考える楽しさだけでなく、越えられていく楽しさのようなものも感じていたようです。主人は、今は単身赴任をしていますが、大学に入ってから息子も物理のことを電話で話したりしています。

林: うちの場合はどこの大学に行くかより、大学を出た後何をやるかが大事だという家庭で、主人はそうした考えが特に強く、大学進学については具体的な願望は持っていなかったと思います。娘も、大学受験のことを父親と話すことはまずありませんでした。主人は法曹なので、娘も文系を選び、だんだん父親に近い道に進むかもしれないと考え始めてからは、世の中で気になることとか、大学を出た後のことなどを、父親とも自然に話すようになっていました。

グノーブルのこと

飯野: そもそもグノーブルとの接点は、上の子が高2の秋のことでした。本人が「英文読解が弱いんだよね。ただ、どう勉強していいかわからない」と言うので、私があれこれ探してグノーブルに行き着いた次第です。

グノーブルに通っている知り合いがいたわけではありませんが、ネットでさまざまな情報を検索した結果、私の直感で「ここかな」と感じるものがありました。最初本人は、学校が終わってから塾のために新宿や渋谷に行くことをとても嫌がっていましたが、冬期講習の初日からすっかり気に入って、通常授業にもぜひ通いたいと自分から言い出しました。

通い始めてしばらくした頃、私が購読している英字新聞を、長男が自分から読み始めるようになりました。その姿を見て私も、「グノでよかった」とあらためて確信しました。

そうしたら、今度は、長男と私の話を聞いていた下の子がグノーブルに興味を持ち始めたのです。そもそも塾嫌いだっただ長男も、「グノは絶対いい。授業がすごいし力がつく」と勧め、次男もすっかりグノーブルに入りたくなりました。

仙石: うちの英語は高1の春期講習から、数学は高2の夏期講習から、本人の意思で通い始めました。私としては、定期テストで点を取る取らない、順位が上がる上がらないではなく、高校時代に勉強のスタイルが身につけばいいなと思っていました。

運動部もバンドもやっていたし、文化祭も運動会も実行委員をやっていたので、とにかく忙しくて、家で勉強をしている姿は、まず見たことはありませんでした。いずれ塾に通うことになるだろうと考えていたら、本人が先輩やクラスの友人から話を聞いてグノーブルを選んでくれました。

英語について言えば、うちの子の場合は、グノーブル

に通い始めてからニュースを英語で聞きたいと言い出して、夜9時のNHKのニュースを録画して、それを翌朝見るのが日課になりました。グノーブルで英語の授業を受けたおかげで、受験という狭い枠を抜けて、視野が実際に広がっていったのが本当にありがたかったと思っています。

林: うちの娘は中学1年からお世話になっています。ただそれは大学受験を意識して、ということではなく、英語を深く学んでみたいという本人の思いからの選択でした。塾選びにあたって考えたことは、あまり受験を意識せずに、使える英語をしっかりと身につけていける塾ということでした。東大や医学部を視野に入れた塾も多いですし、事実そうした塾に、中学生の頃から通うお子さんも周りには多かったのですが、娘にはそうした意識はなく、初めて体験する英語にワクワクさせていただけようです。

部活の日に塾がかぶっていて、授業に出るのに30分くらい遅れてしまう時期があったのですが、「そんなに遅れてしまうならもったいないし、どうなの?」と聞いたことがあるんです。ところが娘は全然揺るがないんです。グノーブルのことがよっぽど好きだったんだと思います。



仙石: グノーブルの授業には生徒たちを夢中にさせるものが確かにあるんだろうと、私も思っていました。無表情で帰ってくることはまずなくて、「お帰り問題ができなくて帰れなかった」と、端で見ていて可笑しいほど悔しがって帰ってきたこともありましたが、1番で帰れた時などは「今日は、早いだろう」と小学生のように胸を張って帰ってきたこともありました。

モーツァルトのことを語り出したこともありましたが、私は音楽をやっているのでも、どうしてそれを私に話すんだろうと思いつつも、楽しそうに話すので聞いていたら、話の内容が確かに面白いんです。「どうして知ってるの?」と聞いたら、グノの英文の教材でやったというんです。グノの教材は多岐に渡っていて、彼の知識のいろんな部分は、その教材や先生の解説がもとになってい

ると思います。教養としての裾野を広げていただいたり、好奇心を育てただけだったり、そういうことにとっても感謝しています。

林：楽しい英文教材を読めることや、それについて先生が深く解説して下さることは、まさに娘の望んでいたことだったのだと思います。中1の頃から、部活が忙しくても、同じ学校で通う人があまりいなくても、何があってもグノーブルを続けたいという点に関してはぶれなかったのは、求めているものや、それ以上のものがグノーブルにはあったからだろうと思います。グノーブルの勉強の先に大学があって、その先にまた自分のやりたいことがあるのなら、大学受験が通らなければならない関門だということも納得がいく、と娘は考えたのだと思います。彼女には他には代えがたい環境だったのでしょうか。

飯野：受験勉強って、「辛いけれど避けられないもの」というイメージがあると思います。本人もそれを覚悟して受験期に向かったのですが、グノーブルに来て、「辛いけれど避けられない」ではなく、「楽しめるから辛いことでもがんばれる」という授業や教材に出会って、それが今の結果につながったと思います。

グノーブルの勉強には本人はいつも前向きでしたが、ただ、延長授業があって帰りが遅くなるので、こちらとしては大変な面もありました。家に帰ってきてから本人はゆっくり食事をしていましたが、時計を見ると、「早く食べさせて、早くお風呂に入れて、早く寝かさないと明日も学校がある」と考えて、私はいつもハラハラしていました。

仙石：時間に関しては、うちではあまり気になりませんでした。むしろ、同じお月謝でここまで丁寧に見ていただけるのはありがたいという気持ちでした。

林：グノーブルの場合、高2までは授業が2時間と短くて、そのおかげで他の活動を続けながら通うことができました。高3の英語は4時間プラス延長で長くなりましたが、大学受験に向かうスイッチを入れていただいたんだと思います。うちの場合は女の子だからか、帰宅後は「サラダくらいいい」と言ってくれたので私としてはラッキーでした(笑)。

娘は、受験の最後まで1日7時間の睡眠時間を取っていましたが、グノーブルから帰ってからは勉強もせずに、ゆっくりお風呂に入って寝るだけという感じでした。グノーブルでやるだけお勉強をさせていただいていたんだと思います。

グノーブルの先生について

飯野：息子たちは二人とも、先生に対しては絶大なる信頼感を持っていました。授業はいつも興味深いことが満載だったようで、先生が授業中に話されたことはよく息子たちの口から聞いていました。本当に何度も(笑)。

仙石：苦しいことから逃げないでやれたのは、先生方がものすごくたくさんのお仕掛けを用意してくださって、息子の好奇心をくすぐり続けていただいたからだと思っています。

グノーブルは、東大の問題に手際よく答えを出すための塾ではないと思います。数学でも、英語でも、基礎や背景などたくさんのお話を教えていただいて、それで頭を使うための土壌を作っていただけました。考える材料もたくさん植えていただきました。もちろん、育て、花を咲かせ、実らせたのは本人です。ただ、そのための準備と手入れをものすごく丁寧に、熱心に行っていたのだと思っています。

私の友人から、お嬢さんの英語をもう少し伸ばしたいのだけれど、息子が通っている塾はどんな感じかと尋ねられたことがありました。「なんて答えたらいい？」と息子に聞いたら、「先生のお話をずっと聞いていたい塾」と答えたんです。その言葉に、本当に信頼しているし、心からついていこうと思っているのだと感じました。

林：グノーブルの先生の話は、娘の口からもよく出てきました。繰り返しになりますが、なんでも納得しないと前に進めない子なんです、グノーブルの先生が大学受験の先を見据えて、その上で彼女が納得できる材料をたくさん与えてくださったことで、「この道でいいんだ」と頑張ることができたのでしょう。

「先生のお話をずっと聞いていたい」という気持ちは娘も同じだったと思います。英語についてはもちろんのこと、さまざまな学問分野に造詣をお持ちで、それを生き生きと話して下さる先生の姿から、「学ぶことは素晴らしい」と娘は確信させていただき、勇気づけられていたと思います。

塾に期待するもの

飯野：子どもたちにとって、志望する分野を選ぶことも、受験する大学を選択することも、受験勉強を続けることも、大きな課題だし、大きな試練だと思います。その時に、受験に出るからやりなさいではなく、興味の持てる材料を提供していただいたので、自然に勉強に向かえたのだと思います。そういう勉強だから英語の力も伸びたのだと思います。

長男の場合は、進路に迷ったりしていました。本人は物理が好きだったのですが、周りで医学部を目指すという友人がいれば医学部がいいのかなと揺れていたようです。結果として、もともと興味があった物理の方に進もうと舵を取りましたが、グノーブルの授業で、毎回、さまざまな分野のお話を聞いて、進路を考えるヒントもいただいていたようです。

次男の場合は、一番上のクラスにはいたものの、周りからは遅れているという意識をずっと持っていたようで

す。それでも勉強は楽しいと言っていましたし、先生が気軽に相談に乗ってくださって、的確にご助言をいただいていたので、親としても安心して通わせられました。**仙石**：共に成長するライバルというのは絶対に必要です。先生に名前でご呼んでいただける環境で授業を受けながら、周りのライバルの存在を身近に感じて、「この人たちにはかなわないな」と思ったり、「でも負けたくない」と思ったり。そうした気持ちをずっと持ち続けられることがグノーブル効果だったと思います。

ライバルに太刀打ちできない時や、どうしても課題を乗り越えられずに途方にくれたときもあると思いますが、そんな場合には、一人ひとりのことを考えてくださる先生方がいらして、見守って下さったり、助言をくださったり、手を差し伸べてくださっていたので、それが諦めずに頑張り続けられた決め手だったのではないのでしょうか。



林：うちは入塾が早かったのも、それだからこそ、中学生の頃から、受験を意識させないで興味を引き出していたことには感謝しています。高3からは大学受験もきっちり視野に入れたサポートをしていただけましたし、その際にも、学ぶことは楽しいし、学ぶことは意義があるんだということを納得させて下さるような誘い方をしてくださいました。

そういう意味ではうちの娘にとっては、グノーブルを「塾」と呼ぶのはどうなんだろうという感じがします。もう一つの学校とか家庭という呼び方の方が相応しいのか、とにかく多感な時期にあった娘にとっては大切な場だったと感じています。グノーブルには、いつも生き生きとしていらっしゃる先生方や、ライバルでもあり仲間でもある人たちがいて、大学受験に立ち向かうエネルギーも与えていただき、しかも、成績を上げるためとか、ただ合格のためという次元とは違って、自分から受験に向かいたいというスイッチを入れてくださったと思っています。

お子さんが受験を迎える方に

林：ご本人さえ納得してグノーブルに通っているのだあ

れば、何の心配もなさなくていいと思います。先生と生徒の距離が近い、これだけアットホームな塾ですので、自分の意思で通っているお子さんは、喜びであったり希望であったり、絶対に何かしら感じていると思います。

いつスイッチが入るかは、それぞれに違うでしょうし、それを親御さんが無理に入れようとする必要はないと思います。グノーブルが好きで通っているお子さんなら、そのうち必ずこの環境の中で刺激を受けて自らスイッチを入れる時がくるはず。子どもを信じて見守ってあげていただきたいと思います。

飯野：うちの息子たちの受験時代を振り返ってみると、そのサポートの経験は楽しかったと私自身は感じます。2年連続して息子たちが大学受験をしたのに、それを楽しむ余裕があったというのは、グノーブルというコミュニティに出会えたことが大きかったと思います。子どもたちはいろんなコミュニティを持っていますが、そのうちのひとつにグノーブルがあって、その中で子どもたちは勉強に夢中になれて、切磋琢磨させていただいて、実力も自信もつけていただいたと思います。

受験生を持つ当事者である親御さんはハラハラして「どうなるんだろう」という思いもあると思いますが、グノーブルは信じてお任せできる塾です。私も、親としては見守ることに尽きるのではないかと思います。

仙石：私も主人も息子の成長をすべてにおいて肯定的に見守ってきました。彼はとにかくいろんなことに積極的でした。部活の試合も、バンドのライブも、文化祭も、運動会も、すべて彼の晴れやかな舞台で、私たちはそれを楽しませてもらってきました。

もちろんその裏では、たくさん練習をしたり、人間関係で悩んだり、いろんな壁にぶつかったりしていたと思います。努力をたくさんしてきたので、その結果として、いい本番を向かえていたと思います。

もちろん、東大受験においても、息子が自分の勉強方法を確立するには、すごく時間もかかっただろうし、苦しさも味わっただろうと思います。でも、息子の場合もそうでしたが、生徒たちがもがいているときに、グノーブルの先生方は、一人ひとりに、適切に手を差し伸べてくださいますので、困難から逃げない気持ちさえ備わっていれば、あとはグノーブルにお任せすれば心配ありません。

ここには、さまざまな学校の生徒さんたちが集まってきたと思いますが、それぞれの学校生活を大事にしながら通える塾だということも大きいと思います。グノーブルは大量の宿題で生徒をコントロールする塾ではなくて、一人ひとりの事情や個性に合わせて手を差し伸べてくださる塾なので、安心してお任せされてよいと思います。

横軸(各科目の勉強バランス)と 縦軸(スケジュール)を 広い視野で見渡そう!

なかむらいちろう **中村一郎**(国語科) × よしだゆうこ **吉田裕子**(国語科)

大学受験に臨むにあたっては、主体的な情報収集が欠かせません。もちろん第一は勉強ですが、やみくもに勉強するのは得策ではありません。志望する大学の情報や入試制度、さらには学校行事・部活動のスケジュールまでをも把握して、それに今の自分を照らし合わせて計画的に勉強を進めることが合格の鍵です。はたして皆さんは、それができているでしょうか? 今回の対談を通して、さまざまな課題が見えてきました。

情報を集め、自分で取捨選択を

吉田: 受験勉強に大切な視野の広さには、横の軸と縦の軸があると思います。まず、横の軸というのは、受験に使う教科をいかにバランス良く勉強するかです。

中村: 私が受け持ってきた生徒の中にも、自分が得意な科目ばかりに取り組んだり、逆に苦手な科目に力を入れ過ぎたりと、アンバランスな勉強の仕方をしてきた人が少なくありません。

吉田: 中学生や高校1年生で、まだ本格的な大学受験のための勉強を開始するまでしばらく余裕ある時期は、好きな科目を楽しく勉強することが中心でもいいでしょうが、受験の近づく高校2年生の秋以降は、受験情報を踏まえた勉強をしていくことが必要だと思います。

生徒を指導しながら感じるのは、これほどインターネットや大学パンフレットに情報が溢れているのに、なぜもう少し積極的に自分からそれらの情報にアクセスしないのだろうか、ということです。

中村: そうですね。ちょっと調べれば情報を手に入れることができるのですが、なかなかそれを自分でしようとしない生徒が多いと感じます。

慶應義塾大学を志望している生徒に、私が、「慶應って国語がなくて、かわりに小論文なんだよ」と言うと「えっ!?!」という反応が返ってくるのがよくあります。

吉田: 中学入試は4教科、高校入試なら国立・都立は5教科、私立は一部を除いて3教科とほぼ一律に決まっています。みんなが同じゴールに向かって勉強します。とこ

ろが大学入試になると入試の方式もさまざまで、配点や教科などかなり違います。そうした部分に気がついていない生徒が多いのでしょうね。

自分の高校で課せられているものをこなせばいいとか、とりあえず一番高いところを目指して難しいことをやってみればいいのか、自分が志望する大学の情報をあまり調べずに、なんとなくのイメージで進んでいるようなことがよく見られます。

中村: 少し語弊があるかもしれませんが、その原因の一つとして中学入試時の成功体験もあるのではないかと、私は思います。

中学入試の場合、受験情報の収集は保護者が中心となるケースが多く、年齢的にも生徒自らが集めることは難しいです。そこで「合格」という成功体験をしたことで、「周りの人に言われたことをやればよい」というイメージが残り、能動的に動くという発想に結びつかない場合があるのかもしれない。中学生になったら「何事にも自分から動こう」という気持ちに切り替えていくようにしてほしいと思います。

吉田: それに、大学受験は制度が多岐にわたり複雑です。推薦入試、AO入試、センター試験利用入試など、ここ15年くらいで制度が年々複雑化し、受験生がそのシステムに追いつけていない部分があるように思います。

基本的な例を挙げると、配点です。早稲田大学国際教養学部を受けようと思ったら、英語100点、国語50点、社会か数学が50点という配点になりますが、教育学部教育学科なら、英語、国語、社会の配点がすべて50点です。



中村一郎
(国語科)

となると、英語を得点源にしている人はそれだけでは教育学部教育学科では苦戦しかねません。こうしたことを早めに知っていれば、自分の勉強のバランスも変わると思います。つまり、情報が自分の勉強のバランスに直結してくるわけです。

保護者や兄・姉の頃の情報で考えていたら、その間に制度が変わっていることもありますし、「友達に聞いた」「インターネットの掲示板で見た」という情報を信じていたら、誤りがあることもあります。自分で裏付けを取る習慣を身につけてほしいですね。

中村: 情報の見方にも気をつけてもらいたいです。例えば、合格倍率。倍率が高いと必ず難易度が高いかということ、そうとも限りません。集まる受験生の質という問題もあります。どれだけ人数が減ろうが求められる学力は決まっています、それをクリアできなければ合格はできません。

吉田: もし合格者最低点が公表されているのなら、過去問を見て、その点数を取れる力をつけるためにはどうすればいいかを考えてみることです。自分から積極的に調べて考えるという経験を、早いうちから積んでおくことが大事です。

中村: よく、高校1・2年生の頃に、「まだはっきりは決まっていないから」と言う生徒がいますが、はっきり決まっていなくても、自分が行きたい大学があるのなら、それを前提として第二、第三志望になる大学・学部を、余裕のあるうちから調べておくことも必要だと思います。



吉田裕子
(国語科)

例えば、私大文系志望で、第一志望が英・国・社の3教科であるということ、数学を簡単に捨ててしまう人がいます。それも考えもので、私大文系でも数学で受けられる大学はたくさんあります。慶應義塾大学の経済学部などは、数学で受けた方が圧倒的に有利だとも言われています。どれだけ情報をインプットしているかで科目選択、勉強のバランスも変わるはずですよ。

吉田: 国語に対する向き合い方も同様です。例えば東工大を目指すならセンター試験で950点中600点以上取れば出願資格が得られ、国語で失点しても十分に狙える点数です。また、実質の合否判定は2次試験の英語、数学、化学、物理だけで決まります。その4教科をやればよいのは、よく併願される慶應や早稲田の理工学部も同じです。

したがって、「自分は東工大を目指す」と強く思っているのなら、国語に力を入れなくてもいいかもしれないのです。ただし、その後に力がついてきて「東大や京大を目指したい」と考え直した場合、二次試験まで国語は必要になってきます。それをあらかじめ知って備えていたかどうかが大問題。高3の秋になって慌てて国語を始めても手遅れになることが考えられます。

中村: 逆のパターンもありますね。東大を目指して勉強してきて、途中で東工大に志望校を変えたとすれば、気持ちにも余裕ができ、切り替えもスムーズに行うことができるわけです。

吉田: あと、国公立の理系では、社会の指定科目が大学によって違います。同じように国公立の文系でも理科が

2教科必須なのか1教科でもよいのかなど、かなり違いがあります。そうした部分も含めて、自分が受けるかもしれない候補の中で、最大限の科目に合わせて準備しておかないといけません。後になってもう1教科足すというのは、かなり苦しいことです。

中村：実際の入試の仕組みを知っておけば取捨選択ができて、その分合理的に時間が使えますし、より合格する可能性が高くなるはずで。しかし、それを知ろうとしないがゆえに迷走して、無駄なことをしたり、落とし穴にはまったりする人が、毎年でてくるんです。

吉田：特に、医学部や中堅の国公立大学は、大学によって求められる科目または配点がかなり違ってきますので、早めに調べておいて自分の中で幾つかの候補を持っておいた方がいいでしょう。いざセンター試験が終わってから泣き顔で調べても冷静な対策が打てません。嫌かもしれませんが、なるべく早いうちに自分の第一志望に届かないことを想定しておくことも大事かと思えます。

私がよく生徒に話すのは、自分の理想とする大学、今の実力をキープできれば合格できるだろう大学、まず間違いなく合格できる大学、この3種類を想定して、それぞれの受験科目はどうか、配点はどうかを冷静なうちにシミュレーションしておくことが大事だということです。

中村：センター試験が終わってから先生と顔を突き合わせて「どうしよう」というのでは遅すぎます。

2014年および2013年のセンター試験は国語が難しく、国語で失敗した生徒が多かったです。そこで初めて志望校の受験科目を調べてみて「小論文が必要だ」ということが分かり、慌てて「小論文をとります！」と言ってきた生徒がいましたが、そこから始めたのではもう手遅れなんです。

小論文に関して言えば、慶應義塾大や医学部など一般入試で課せられるのみならず、AO入試や推薦入試、最近だと慶應義塾大法学部のFIT入試でも課せられます。とくに慶應義塾大法学部のFIT入試は事前に資料を作ってプレゼンテーションをするという、極めて特異な能力が問われる入試制度です。

大学が要求する水準も高く、当然、準備も大変なわけで、そうしたことばかりに力を入れ過ぎてしまうと、どうしても一般入試の勉強が疎かになってしまいます。それを知らずに、「チャンスが増えるからとりあえず受けよう」と、AO入試や推薦入試、FIT入試を安易に考えていると後で取り返しがつかなくなってしまうこともあります。

吉田：確かに最近の入試にはさまざまな形態があり、チャンスが増えていきますね。しかし、それぞれの入試形態に適応した生徒にはぜひオススメしたいですが、そもそも不向きである生徒にとってはただ時間が取られ、一般入試へのリスクだけが高くなってしまいう可能性もあると言えます。

中村：AO入試にしてもFIT入試にしても、大学側は一般入試では測りきれない能力を持った学生が欲しいからこそわざわざ実施するわけです。特に志望動機がないのにAO入試を受けたり、極度のあがり症なのにFIT入試を受けたりするのは、その意図にそもそも合っていないのです。

吉田：「受ければ儲けもの」という軽い気持ちで受けたとしても、不合格はやはり心理的ダメージが大きいものです。自分が目指している大学に「NO」と言われるわけですからね。そこから気持ちを立て直してみても、その頃にはもうセンター試験直前です。試験形式や自分の適性、準備の負担などを吟味したうえで受ける・受けないを考えてほしいと思います。



中村：準備の必要な推薦入試、AO入試を受ける際には、他の人よりも早め早めを心掛け、高3前半までに学力を仕上げておいてほしいとも思いますね。

学習計画は中期・長期で考える

中村：第二の視野の広さは時間軸ですね。学習を長期的にどうスケジュールしていくかということです。例えば、高3であれば目の前の授業・宿題に追われるばかりでなく、1年間あるいは3カ月や6カ月というスケジュールを俯瞰することを意識してほしいです。

吉田：高1・高2の生徒も、例えば部活をいつまで続けるか、学校行事は何月が忙しいか、あるいはここで海外留学に行きたいなど、大まかに3年間の生活を分かっていた方が勉強を調整しやすくなると思います。それほど細かくなくてもよいのです。例えば、高3の春は学校行事が忙しいから、高2のうちに数学をしっかり固めてお

かなかちな、とか。そうしたことを見越しておいてこそ充実した高校生活が送れると思います。

自分なりに計画が立ってれば、周囲の通塾状況や学習進度を見て焦ることも減り、実際手遅れにもなりにくくなります。

中村：手遅れという意味では、高3になって英語が苦手だとかかなり苦労しますね。

吉田：昔は、数学が得意だと、英語はそこそこに、数学で勝負しようという戦い方もよく見られましたが、今の入試では、英語はできてあたりまえといふところがあります。15年前、20年前と比べると、長文の語数も増えている大学が多く、センター試験ですら読むのが遅ければ解き終わりませんね。



中村：グノーブル生であれば、授業とGSLをフル活用することが大前提ではないでしょうか。

吉田：そして、他の教科においても、手遅れという状況を避けるためには、「まるで分からない」という単元を高3に残さないことです。例えば、数学の定期テストの範囲の単元が全然分からないという状態で試験に臨んではいけません。

中村：高1、高2での勉強も大事で、その時期は、高3になって自分が目指す大学に合わせた勉強をしようとする時の「土台づくり」をする期間とすることができます。

吉田：英語・数学は比較的そう考えてくれている生徒が多いんじゃないでしょうか。ところが国語や理科、社会になると、「3年生になってからでもなんとかなるだろう」と考える生徒がけっこういます。

グノーブルの物理のカリキュラムは高3の秋からテスト演習ですが、それは夏までに基礎力をつけておくこと

が前提になったカリキュラムです。高2の夏から物理の土台を固め始める学習スケジュールを前提にしているのです。

中村：とはいえ、高1・高2の頃は、理科・社会まで受験レベルの勉強をする余裕のない生徒も多いでしょうから、最低限は学校の定期テストに対し、後れを取らぬよう勉強しておくことです。ただし、英語、数学、そして私が思うに古文については、計画的に基礎固めをすることがとても大切です。

吉田：このように勉強の計画は、短期計画よりも中・長期で俯瞰した計画の方が良い場合が少なくありません。

公立の中学などでは、定期テストの前に計画表を書いて提出させることがあります。これは、一週間自分がどのように勉強するかを一日ごとに細かく計画表にするものですが、立てるのに時間ばかり取られて、実際には計画通りにいかないことが少なくありません。

受験勉強のスケジュールリングにしても、張り切って週間スケジュールを組み、こなせなくて自己嫌悪に陥る生徒が見受けられます。厳密な計画でなくてもよいのです。1カ月とか3カ月とか、もう少し中期的にスケジュールリングした方がいいと私は思いますね。

例えば高3であれば、模擬試験がちょうどいいペースで行われますし、高1・高2ならグノーブルのクラス分けテストなどを一つの目標としてみるのもいいでしょう。数か月単位で、「この時期までに〇〇を克服しよう」という目標を立てて、常にそれを頭の片隅に置きながら毎日の勉強を進めていき、最終的にその期間の勉強が成果としてまとまっていくような計画づくりが大事だと思います。

中村：もちろん中には、短期計画をやりこなして成果を出せる人もいますが、私の経験からすると30分単位、1時間単位で計画を立ててきっちりやれたという人は皆無です。ほとんどの場合、最初は小さなほころびだったものが、だんだん大きくなって結果的に計画自体が破綻してしまうことにもなるのです。

己を知り、デザイン・コントロールせよ!

中村：「私ってこのままじゃマズいですかね?」と聞いてくる生徒がいますが、本来それは人に聞くことではありません。自分のことは自分で知って、勉強方法をセルフデザインして、それを自らコントロールしていくことが大事です。

吉田：「参考書は何を買ったらいいですか?」という生徒も多いですね。アドバイスはしますが、個人的には参考書選びを人に任せてしまうのは、少し損をしていると思うんです。参考書というのは、これから数か月、時には数年間お付き合いするもの。それを選ぶということは、自分の勉強生活を思い描いたり、それをやり終えてできるようになっている自分をイメージしたりすること。楽

Gnoble Cross Talk

しいことだと思っただけでね(笑)。まして私は古い師ではありませんので、「あなたはこれで勉強したら合格するよ」などと100%断言することはできません。

解説が詳しい方がいいのか、それよりも難問がたくさん掲載されている方がいいのか。そうしたことは自分で自分の適性を知って、その適性に合った参考書を選び、勉強スタイルをデザインする必要があるんじゃないかと思います。

中村: 参考として聞きにくること自体はいいです。ただそれを鵜呑みにしてほしくないのです。私も小論文の参考書でどれがいいか聞かれることがあります、いくつか候補を挙げて教えるようにしています。すると、「どれがいいか選んでください」という言葉が返ってきます。そうじゃないでしょ、と(笑)。自分で決断することに対する不安があるのでしょうか。

吉田: あと、過去問の問題集を買って、解き始める前に「傾向と対策」を読んで、「ああ、この大学の問題は深い知識が必要なんだな」と、まるで評論家のように情報を仕入れる生徒もいますが、そうした分析も鵜呑みにするのは危険だと思います。

例えば、「傾向と対策」に、「この大学の英語は、専門的な単語も出るから語彙力が必要である」と書いてあったとします。それで慌てて単語帳を買う生徒がありますが、その「高い語彙力」というのは、もしかするとその人にはすでに身につけているかもしれません。「傾向と対策」はあくまでも一般論です。そもそも、グノーブルの英語を受講しているなら、単語帳を使った勉強はしませんし、単語帳を使わずにかなり高い語彙力が身につく仕組みになっています。

中村: また、「先生はどうしていたんですか?」と聞かれて、「僕はこうしたよ」と答えると、「じゃあ私もそうしてみます」という答えが返ってくる。いや、それはちょっと待て、と。それは僕の成功体験であってその子にあてはまるとは限らない。成功の法則というのは、生徒自身が考えなくてはならないわけで、人の話をただ鵜呑みにしてはいけません。

自分なりのリテラシーを持って、自分にあった勉強方法を選別しないと、「先生の言う通りにやったけど、上手くいけませんでした」という人任せの受験になりかねません。そうした背景にあるのは、自分で決めることに対する恐怖心なんでしょうが、受験の当事者は本人なわけですから決定権を人に預けてはいけませんね。

吉田: ついこの前、「先生、夏休みって何時間勉強すればいいんですか?」と聞いてきた生徒がいました。「ある先生が『6時間でいい』と言ったので自分も6時間にしようと思うんです」と。でもそれは、その先生の経験であって、自分がやりたいことや、やらなければならないこと、集中力などを考えて、6時間が適切だと思うならそうすればいいし、それでは足りないと思うならもっとやった

方がいい。そのあたりは自分で考えて判断していくことでしょ、と答えました。

中村: 「合格者の声」に「毎日10時間寝ていて志望校に合格した」と書いてあったのを読んで、勇気もらった、という生徒がいました(笑)。それは良いのですが、本当に自分が10時間寝ることが最適なのかはきちんと見極めてくれないと。

吉田: 自分で決めることに対する恐怖が、ひいては、「とりえず塾の授業をとっておこう」というところにも表れていますよね。



例えば、「週に8コマ塾の授業をとって忙しいんで」などという生徒もいます。これは、今抱えている不安を、塾の授業をたくさんとることで帳消しにしようとしているとも考えられます。ただ、たくさんとったことでキャパシティオーバーになって、どれも集中できなくなって逆効果である場合もありますよね。

中村: その点、グノーブルは授業をとらせよう、とらせようということではありません。中には、時間を埋め尽くさんばかりに授業を取らせようと営業する塾もあるそうですが、その生徒のことを第一に考えれば、本来そうしたアドバイスは出てこないはずですよ。

私は、小論文を見ていてよく書ける生徒には「君は講習だけでいいよ」と言うことさえあります。自分自身の苦手科目の克服や復習などの時間もたくさんとってほしいからです。ただ、生徒自身に不安があって、他の塾で授業をとりまくって安心しようとする例もあるようです。

私は生徒の能力を疑っていません。高校生の思考力・判断力を重視しています。だからこそ、こうしたことを伝えたいのです。実際に自分で考え、決断する恐怖を乗り越えて成果を出す生徒もいます。結局のところ、大学受験というのは、自分で考え、自分で答えを見つけていかないとはいけません、それが人間としての成長にもつな

がるはずだと思っています。

吉田: 今年の「合格者の声」の中で、東大に合格した生徒が、「大学受験を通して、自分で決断し、その責任をとる能力が身につきました」と書いていました。それはまさにその生徒が人としても成長した証です。こうした体験ができるチャンスなのだと気づいてほしいです。

中村: もちろん、分からなかったら、相談してもいいのです。いろいろな人の意見を聞いて比較検討するのもいいでしょう。ただ最終判断をするのは自分です。そこは押さえておきたいポイントですね。

吉田: さて、自分の現状を知る手段の一つに模擬試験がありますが、これも使いようですね。力がついていないうちに模試を受けて、試験中ほんやりと時間を過ごしては意味がありません。学校で指定されるもの以外は、自分の力をよく見極めて、選別する必要があると思います。

中村: 信頼できる授業があって、その復習をすることによって志望校に合格できる力がつくという確信があるのなら、模試はただのチェックです。



生徒によく言うのは、やるべきことはとても多いので自分なりに選別しなくてはならないということです。現状チェックの道具として模試があるわけですが、それをもとにしてこれから何にどう取り組んでいくかを考えることが肝心で、数多く受けることに意味があるわけではありません。

吉田: 志望校の合格可能性判定だけを見て一喜一憂する生徒がいますが、例えば志望校が決まっていて、変える気がないのであれば、A判定が出ようがE判定が出ようが、そこが重要なわけではありません。

大切なのは、教科バランスや分野別の得点率などを参考にして、できなかった分野を克服していく努力です。単に帳票を見るだけでなく、復習を並行するべきです。

もし普段できているタイプの問題がたまたま計算ミスなどでできなかったということが分かれば、そこまで気にすることはありません。ただし、その誤答が分野全体の未理解によるものなら、塾の教材や問題集で補う必要がありますね。また国語でよくあるのは、志望校と出題傾向が違い過ぎて、できなくてもそれほど気にする必要がないということ。小説が出題されない大学を受けるのに、小説の不出来で悩んでも仕方ないのです。

中村: 模試の復習をするというの、良い場合もあれば悪い場合もあります。難しすぎて手が出なかったものに、膨大な時間をかけて復習しても効率が悪いです。模試は分析に留めて、むしろ日頃の授業の復習を進めるべき場合もあります。一方、学校でしかやっていない教科で、徹底復習をすることで実戦力をつけるべき場合もあるかと思っています。

吉田: 私はよく、受験をダイエットにたとえて話すのですが、模試や過去問演習をやるのは、ダイエットでいうところの体重計に乗ることなんです。ただ毎日体重計に乗るだけで何の反省もなく生きていたら痩せるわけがありませんよね。反省して何らかのアプローチをするからこそ痩せるわけですよ。逆に言うと、普段から運動をしているのなら、体重計に乗らなくても自然と痩せていくわけですよ。そういうふうに模試や過去問演習をとらえたらよいのではないかと思います。

中村: 結果が思わしくなかったとしても、「どうしてこうした結果になってしまったんだろう」とか、「どうしてもっと早く始めなかったんだろう」とか後悔するのではなく、「じゃあ、合格に向けてどうしたらいいのか」を未来志向で考えること。「WHY」から「HOW」への気持ちの切り替え、と私は言っています。

吉田: 漠然と悩んでいても、一歩も前進しません。「私は数学がダメなんだ」ではなく「自分はこの単元の理解・演習が不足している」「これからは〇〇克服のために△△をやろう」というように、課題やミッションに分解して、一歩一歩着実に進んでもらえればよいと思います。

中村: 自分で考えて自分で決めるには勇気がいります。しかし、それができなければ、実りある受験勉強はできません。そして、そうした勇気を持つということが、その人の本質的な人間の成長にもつながっていくのだらうと思います。

私たちの受験期を振り返って

吉田: 勉強するときの座右の銘がありまして、それは「MAT30」という言葉なんです。知人に聞いた言葉で、「辛いと思ったところから、もう(Mou)あと(Ato)30分」という意味です。妙にインパクトがあって、「もう疲れたから、このあたりでやめようかな」と思ったときに必ず思い出すんです。そこから、あと30分頑張ることを続けていると、だんだん頑張れる自分になっていきます。

そうすると自信もつきますし、「今日はここまで終わらせることができた」という達成感を感じることもできます。

もう一つ、高校生の時に支えとしていた言葉が、「限界の向こうは無敵大」というものです。ある歌の歌詞なのですが、「ここまでしかできない」と限界を決めつけずに、その先まで進むことができれば、本当にどこまでも進むことができる、という意味だと思っています。自分のキャパシティの上限を自分で決めつけてしまいがちですが、そこで踏ん張ることでキャパシティそのものが広がっていくはずですよ。

高い壁に挑戦する受験勉強の期間というのは、自分のキャパシティや可能性を広げるチャンスです。そこまでやれば、結果に関わらず、自分という人間が誇れるだろうし、人生における実力もついているはずですよ。

中村: 私は浪人時代、白髪になったんですよ。それほど

辛かったのですが、尋常でなく頑張った1年間であったと自負しています。大学を卒業し働き出してから辛くはありましたが、浪人時代よりはマシと思うと耐えられるし、「あの浪人時代を乗り切ることができたのだから自分はこれもできる!」と自信を持てるようになりました。もしドラえもんがタイムマシンを貸してくれるなら、19歳の自分に会いに行って「よくやってくれた」とお礼を言いたいくらいです。

よく、「勉強は自分のためにするもの」と言いますが、「自分っていったい何だ?」と考えると、今の自分もそうですが、将来の自分でもあるわけです。30代、40代になって、「あの時よく勉強してくれたね。おかげで今幸せです」と、将来の自分が今の自分にお礼を言ってくれるような取り組みを、今この時期にしてほしいと思います。

◎ 国語科が推奨する受験対策

吉田: 古文については高2の終わりまでに仕上げたおかないと捨て教科になりやすく、国語(古典)がない大学や国語の配点が低い大学を探さなくてはならなくなってしまいます。2年生までに文法は一通り頭に入っていて、基礎的な古文単語は200~300語覚えている状態にしておきたいものです。

3年生になると、東大国語や一橋国語・私大国語など、具体的な目標に合わせた講座が設けられます。基本的には過去問題での実戦演習です。そこで他の人が、「〇〇大学に向けた思考力を鍛えよう」と言っているときに、古文の単語の意味が分からないという次元で悩んでいる、置いていかれてしまうことになりかねません。

グノーブルの古文のカリキュラムは高1もしくは高2の1年間で古文の学習を完結させます。春期講習の段階で必要な文法は一通り概観してしまいます。英語などと比べると、必要な文法や単語のボリュームが少ないため、春のうちに全体を見渡してしまい、そこから実践力を身につけるためのトレーニングです。4月の段階から長文を自分の手で読みこなすことに挑戦し、次第に長文をレベルアップさせていきます。12月頃には東大レベルの長文に挑めるような構成になっています。古文というのは、現代日本語と通じるものもあるだけに、文法・単語のポイントを意識化しにくいのですが、それを実際の文章の中で気づいていくトレーニングがとても大事だと考えています。

中村: 現代文には部分読解と全体読解の2つがあります。

例えば、部分読解は指示語や接続語を踏まえて傍線部に関連のあるところを探してることが基本です。内容を把握するには語彙力に加え、自分の主張を排除し、書かれている内容をそのまま受け取る客観的理解が不可欠です。大学受験では、思考力といっても「気持ちを想像する」ような曖昧なものではありません。そのあたりを実際に問題でやっていきます。

私はさらに、書かれている文章の背景を知っておくことが、問題を解く場合の手助けになるとしており、授業ではそこまで踏み込んだ解説をしています。文章の知的背景や現代の知的潮流を理解していると、そこに書かれている内容がより分かりやすくなります。

小論文の講座は高2の冬期講習からです。小論文の実力には大きく分けて2つあります。1つ目は内容がきちんと書けているか、もう1つは文章が正しく書けているかです。前者の場合は、どのようにポイントを押さえてどのようにアプローチすればよいか分かれば、非常に早く力をつけることができます。ところが後者の場合は、文章そのものが書けない、ということなので、これを磨くには時間がかかります。

したがって、自分は「文章は書けているけど内容が書けていない」のか、あるいは「文章も内容も書けない」のか、そこをまず見極めることが大切です。その見極めのタイミングとして高2の冬期講習に小論文入門を開講しているのです。

グノーブル
OB・OG
インタビュー

「FLYプログラム」参加体験談

世界に出て、 自分と出会えた。

7期生の黒木あたるさん、山田智子さんの「FLYプログラム」活動レポートを、Gno-let vol.12でご紹介しました。当時は活動の真っ最中で、それぞれに訪ねた国での奮闘ぶりを投稿していただきました。お二人は現在プログラムを終えて帰国し、東京大学の1年生として学生生活を送っています。このプログラムを体験してどんな発見があったのか。また、その経験が今の学生生活にどう活かされているのか。お二人にじっくりお話を伺いました。

(取材・文 吉村高廣)

どのような体験をしてきましたか

黒木: ひとこと言うと、ずっと旅をしていました。6月に旅立ち、8月の頭に一度帰国してバイトをしていましたが、その後また1月から2月まで、西ヨーロッパ、中国、東南アジア、インドなどを、バックパックを背負って回りました。特別な目的意識があったわけではありません。12号のグノレットにも投稿させていただいた通り、

いろいろな国のいろいろな人や文化に触れ合いながら、これまでの自分を振り返ってみて、これからの指針を探す時間が欲しかったんです。

山田: 私がFLYプログラムに参加した目的のひとつが、海外で働いてお金を得る体験をすることでしたので、アルバイトができるビザを取って旅立ちました。まずカナダでホームステイをしながら語学学校に3カ月間通い、ホームステイ期間が終わってからはネットで住む場所を



くろき
黒木 あたるさん
東京大学文科一類1年
駒場東邦出身



やまだ ともこ
山田 智子さん
東京大学文科一類1年
桜蔭出身

「FLYプログラム」参加体験談

探して、シェアハウスでの生活をスタートさせました。その頃からアルバイトも始めました。最初に働いたのはドーナツ屋さんでしたが、その仕事は2週間半ほどしか続かず(詳しくは後ほど)、その後は託児所ですと働いていました。最後は、カナダとアメリカの西海岸の旅行をして帰国しました。



FLYプログラムへの参加動機は

黒木: 大学に合格した時に、「東大に入って、大学生活に忙殺されて、気づいたら就職している」と、そんな流れが見えてしまったんです。流されていくのではなく、自分の意志で動くために、流れをいったん止めたかったんです。

ずっと、「とりあえず」という気持ちで、中学時代も、高校時代も、当たり前前の学校生活を続けていたところがありました。受験勉強も、「とりあえず大学に受かったら」と思いながら続けていました。中学・高校の生活はそれなりに楽しかったし、受験勉強にも意義は見出してはいました。でも、大学選びも、「周りが東大だから自分もとりあえず」という感じで、何かをいつも先延ばしにして、自分の中の違和感もずっと抑えていたようなところがあったんです。

ところが東大に入ったら入ったで、今度は進振り(進学振り分け)のために頑張ることになるし、結局また忙しい毎日が続いていくんじゃないかなと思って、だから1回流れを止めて、自分の時間を確保したかったんです。

山田: 今の話には共感できるところがいろいろあります。私の場合、中学、高校のときの生活の中心は勉強でした。

「大学生になったら留学したい」という希望はありましたが、ただ、それはとても漠然としたもので、具体的なビジョンではありませんでした。高校生の頃は、大学入学後やその先のことを真剣に考えもせず勉強だけしていた、と言ってもいいかもしれません。

実際に大学に入ってみたら、思っていた以上に忙しそうで、夏休みはあるにしても、自分のしたいことが全部できるわけではない、そもそも自分のしてみたいことも分からない、このままでは自分が本当にやりたいことも分からないまま短い4年間を過ごしてしまうんじゃないかと、少し恐ろしくなり始めたんです。大学生活に入る前に、まずは大学時代に自分は何をしたいのかをはっきりさせたくて、それでFLYプログラムに参加しました。

やりたいことは見つかりましたか

黒木: 正直なことを言うと、人生で何をしたいのかとか、具体的にどんな仕事に就きたいかということまでは見つかりませんでした。でも、自分がどういう人間なのかは以前よりはっきりしました。どんなことに興味があって、どんなことに楽しさを感じられて、どんなことは耐えられないのか、などといったことです。

たぶん、僕はお金とか地位にはあまり興味がなく、他人と比べて勝ったとか負けたということも嫌いで、自分が大切に楽しいと思えることをずっとやっていきたいのだと思います。

例えば、カンボジアの村に行って、現地の子どもに英語を教えるボランティアに参加した時のことです。一緒にいた他のボランティアの人たちは、現地の言葉であるクメール語には興味を示さなかったのですが、なぜか、僕はクメール語をものすごく勉強したくなったのです。そこまで勉強しても、今後クメール語を使う機会なんてないのだろうけど、それが分かっているけど、現地の人たちと現地の言葉で話せることが僕には楽しいことで、大切なことだったんです。その村を出るときに、村の人と別れの言葉を交わしたのですが、話していただいたことはすべて分かり、こちらもしっかりと挨拶ができて、「よし。納得の別れができた」と思えて嬉しかったです(笑)。

そこにあったのは損得ではありません。自分が興味を持てることには、とことん突き詰められる自分がいることが分かりましたし、この先何かを選択しようとする時にも、こんな気持ちが基準になるんじゃないかなと思います。

山田: FLYプログラムを活用して海外でアルバイトをするというのは、自分の漠然とした夢の予行演習でもあったんです。私は将来、海外で仕事をしてみたいという思いがあって、短い期間でも現地で働いてみるのはいい経験になると考えました。

ところが最初のドーナツ屋さんのアルバイトはすごく忙しくて、仕事を速くしないとお客さんが滞っちゃうんです。マネージャーさんからせかされたり、ミスが続いてひどく怒られたりの連続でした。それまではアルバイトもしたことがありませんでしたし、親以外の大人に怒られたこともなかったので、思い切りへこまされました。

実は、以前の私は、がんばれば大体のことはできると思っていました。運動だけは遺伝的なものもあるので自分でもこだわりはなかったのですが、勉強は自分ががんばれば成績も伸ばせたり、文化祭の企画でも考えて努力すれば一定の成果が上がる経験をしていて、がんばったことで困ることはなかったんです。

ところが、ドーナツ屋さんでは、どれだけがんばっても皆ができてることが自分ではスッとできなくて。それでも、努力を続ければできるはずだと考えて2週間は続けていました。仕事場では絶対泣きませんでしたけど、部屋ではいっぱい泣きました(笑)。3週間目に入ったときに、「これは自分には向いていないのかな」と考えたらずい納得できました。やっている仕事自体が好きではないことも悟って、向いていないことを無理やりがんばっていても発展性はないんだということを初めて実感しました。

その後働いた託児所でも大変なことはたくさんありましたが、敬意の持てる人に指導を受けられて、環境も良かったし、何より私は子どもが好きだったので続けられました。

実際に社会の中で働いてみて、がんばればどんなことでも何とかなるとは限らないと知らされましたが、自分に向いていることであれば、がんばれるし、成長もできるし、長く続けることもできそうだと分かりました。

自分が変わったと思いますか

山田: FLYプログラムに参加して自分を変えたいと思っていましたし、海外に行ってさまざまな体験をすれば劇的に変わると思っていました。でも、海外で仕事をしながら暮らしてみても、自分の奥の奥は自分のままでした。変わったのは、自分に対する自分の見方です。

例えば、英語力はカナダに行ってもすごく上がったわけ

ではなくて、向こうに行く前に持っていた英語力で通じていたんです。向こうに行って必死にトレーニングしたわけではなくて、初めから、意外にもちゃんと話せました。その英語力は以前から自分が持っていたものなのに、恥ずかしいという気持ちが先に立って、一歩踏み出すことをしていなかったんです。



今なら一人で海外に行ってもコミュニケーションもとれるし、働いて生活もできると思います。能力が伸びたというよりも、自分が持っている力をちゃんと意識できて、それを生かせるという自信が持てたという点で変わりました。

黒木: 僕は、自分がいろいろ変わったと思っています。以前は、失敗するのが怖かったです。人から怒られたり、人から蔑まれたりすることが怖くて、だから僕は勉強ばかりしてきたところがありました。勉強はよくできたし、勉強していれば誰からも怒られることもないし、成績が良ければ尊敬だってされます。だから、ずっとそこにこもっていたんです。大学でも勉強ができれば評価されるし、社会に出ても勉強に代わる何かの成績で評価されると思っていたので、そこにこもってさえいれば、失敗をしない人生を送っていけると考えていたんです。

旅に出て気づいたのは、必ず失敗するという事です。そして、失敗してもそこで終わりじゃなく挽回可能だということが分かりました。

事実いろんな失敗をしましたが、イタリアで、自分が油断していたせいでスリにiPhoneを盗まれたことがありました。警察に行っているいろいろ手続きをしてその日は終えましたが、情けないことに、次の日は外に出るのが

中学受験グノーブル、スタート!

子どもたちの能力を ベストの形で引き出す

「知の力を活かせる人に」を教育理念としているグノーブルグループは、中学受験の指導では、具体的にどのようなことにポイントを置いているのでしょうか。vol.12に引き続き、眞田素先生のお話を紹介します。

学んだことを有機的に 結びつけていく力

—vol.12では、これまでの先生のご経験と生徒との向き合い方について伺いました。グノーブルでは具体的にどのような指導をされていますか。

眞田 大学受験グノーブルでは「知の力を活かせる人に」を教育理念にして、生徒たち一人ひとりと向き合った指導をしています。このことは小学生に対しても全く同じであると考えています。子どもたちの能力や興味は、100人いれば100通りあります。偏差値だけを基準にした指導ではなく、100通りの能力や興味があれば、100通りの指導、向き合い方があるはずです。そのためにも、子供たちが持っている能力、抱く興味をできるだけよい形で引き出したいと思っています。

—受験における多様な能力や興味とは、学校選びにも関係するのですか。

眞田 その通りです。たとえば算数の授業を行うと、とにかく点数を取ることに集中する子がいたり、ある傾向の問題に対して興味を持ち、解くことに楽しみを見出す子がいたりします。これらは良いとか悪いとかという問題ではありません。中学受験を意識した勉強であっても、そうした一人ひとり違っている能力や興味を伸ばすことから始めることが大切です。

「もっといい法則がある」「もっといい調べ方があるに違いない」と没頭する生徒もたくさんいます。いわば、生徒たちは、算数・数学の森を探検しているようなものです。この森は、数千年の間、人類がさまざまな発見をして興奮を味わってきた森ですから、その探検は子どもたちにとっても面白いに決まっています。

グノーブルでは、普通の小学生が経験する以上のことに触れています。頭をひねったり、手を動かしたり、いろいろな角度から見てみたりしながら、それでもわからない苦労を多く経験するからこそ、解き方に気付いたときのドキドキ感も、達成感も人一倍経験するはずです。

また、いつもお話していることですが、お子さま一人ひとりそれぞれに合った学校があります。こういう能力がある、こういう興味を持った子ならば、どの学校に行ったら充実した学校生活を送れるだろうか、大きく成長できるだろうかなどを常に考えながら子どもたちに接しています。

—先生の担当教科である算数について学年ごとの指導の特色を教えてください。

眞田 2・3年生では処理能力と思考力を高める授業を行っています。また、4年生と5年生は単元別にカリキュラムを組んでいます。一つの単元を4回の授業で学ぶのですが、たとえば「速さの文章題」では、旅人算、流水算、時計算・通過算、グラフの4回といった具合です。このカリキュラムにより、その単元を総合的に理解し、考えていくことができるようになります。

さらに6年生の後半になれば平常授業と並行して志望校別授業も行われます。平常授業では算数の力をより着実に上げるために、復習問題や今の力をはかる問題、少しレベルの高いチャレンジをする問題など、幅広く対応できる力をつけるようにしています。また志望校別の授業では、合格に向けての対策問題や予想問題で合格力をより高めています。

たとえば、算数の図形問題では自分で図形を動かしてみたり、等しいところを探してみたりと、柔軟な発想や多角的な視点の持ち方が大切な場合があります。



眞田 素

(東京校 算数担当)

「子どもたちには、時に声をかけて激励し、時に黙って支えてあげることが大切です」

このような発想や目を養うには、ある程度時間をかけて自分で糸口を見つける努力が必要です。そうした習慣は、図形問題に限らず、先々の勉強に必ず役立つはず。結局、自分で発想したことでなければ、自分の力にはなりませんし、自分で気づいたときの喜びは次への意欲にもつながりますので、こうしたことを念頭に置いて各学年で指導を行っています。

—2年生から5年生にかけて算数の基礎や考え方を学び、6年生で本格的な受験体制に入るのですね。

眞田 受験では、それまで身につけた基礎的な処理能力や思考力を結びつけていく能力が求められます。実際の受験では見たことがない問題が出されます。その時諦めずにそれまで学んできたことの中にヒントがないだろうか、どの考え方をどのように組み合わせたら問題を解けるだろうかと考えていかなければなりません。教えられたことをそのまま覚えるのではなく、そこから先を自分で調べたり、学んだことを有機的に結びつけることが必要なのです。自分で学ぶ楽しさ、調べて解決していく楽しさを分かるようになれば、いろいろな考え方を結びつけて、問題を解いていく能力も必然的に養われていくものと考えています。

偏差値だけではない 学校選び

—中学受験を控えた子どもをお持ちの保護者に伝えたいことはありますか。

眞田 受験をする子どもたちは、まだ小学生です。親がそれに関わることは大切なことです。ただし、過干渉になることは避けるべきです。スタンスとしては、「見

守る」ということになります。時に声をかけて激励し、時に黙って支えてあげることです。

もしお子さんが「自分で勉強するからもう親が関わらなくても大丈夫」と言っても、その言葉を額面通りに受け取ることが難しい場合もあります。「怠けたい」というシグナルの場合もあるからです。子供から目を離し過ぎないことが、親に求められている姿勢です。

—実際に受験する中学を選ぶとき、親はどうすべきでしょうか。

眞田 これも先ほどお話したことと重複する部分がありますが、偏差値だけで受験校を選ばないことは重要なポイントです。そのためにもいろいろな学校を見てほしいと思います。

今の親御さんの世代が小学生や中学生だった30年ほど前と比べると、私立中学の姿は大きく様変わりしています。多くの学校で大学受験に向けての指導に力を入れたり、生徒さんの力を伸ばすために工夫したカリキュラムや行事を導入したりするようになってきました。自分の経験や昔の知識だけに頼らないことも大切です。

中学受験は最終の目的ではなく、子どもたちの将来のためのスタート台に立つことだと思います。変化の激しい現代には、「知識は使い次第で応用が利く」とか、「知識の組み合わせが新しい発想につながる」とか、こうしたことを小学生のころから経験上知っていることが大切だと思います。その経験をうまく促す環境をつくっていくことも私たちの仕事です。私たちは子どもたちがよりよいスタート台に立てるよう一人ひとりのお子さまを見つめ、サポートをしていきたいと考えています。

—ありがとうございました。

小学2年生の算数・集団授業がスタート

考える面白さと 喜びの積み重ねが 脳力を鍛える!



勉強のアドバイスをするのはドクター Gno (グノ)

算数に親しみながら、そのセンスを磨く!

中学受験グノーブルでは、9月から小学2年生の算数を新たに開講します。2年生の算数学習の目的は、本格的に中学受験の勉強を始める前段階として、算数に楽しく取り組み、親しみながらそのセンスを磨くことです。

テキストと授業内容について

テキストは、算数の基礎力を身につける問題、思考力を育てる問題、数に対する感覚を磨き処理力を高める計算問題の3種類の内容を毎回扱っています。授業ではこれらの問題と復習テストを75分で行います。

テキストで扱っている問題はかなり高度な水準ですが、問題の問い方やイラストをふんだんに使うことで、小学2年生でも十分興味を持って取り組める内容になっています。

また、学習のペースがつかめるようになる10月からは日々の計算力をきたえるための教材「基礎力テスト」

も、他学年と同様、毎月1冊お渡ししていきます。

難問も楽しみながら

グノーブルでは、楽しく考えることが子どもたちの脳をより活性化すると考え、わくわくするような楽しい授業空間の提供を目指しています。

算数では高度な思考力を問われる問題があります。例えば、紙を折ったり、サイコロを転がす問題は、「カタチをイメージ」する力がないと正解を導きだすことができませんし、起こりうる場合を数上げる問題は緻密さがないと正解が得られません。こうした問題に対処する力をつけるためには、考える過程を楽しめる問題に多く取り組み、正しい考え方を習得することが必要です。グノーブルの授業で楽しみながら算数の力を伸ばしていきましょう。

▶2年生の授業の開講校舎と曜日 15:30~16:45(1回75分授業)

東京校	自由が丘校	成城学園校	吉祥寺校
月曜日	水曜日	金曜日	金曜日

テキストでは、親しみやすいイラストやキャラクターたちが語りかけてくると、楽しみながら勉強できる内容がたくさん盛り込まれています

「テキスト」とは別にご家庭での毎日のワークシートとして「基礎力テスト」が配布されます

難関中合格シリーズ 学校別対策

合格に必要な徹底した志望校対策をこの1冊で!

- ①26年分の重要な過去問題をすべて掲載!
- ②単元ごとに問題を分類! 単元ごとの攻略法を明示!
- ③他では見られない詳しい解説!

女子学院中 合格への250題

最新刊



筑駒 合格への100題



桜蔭 合格への140題

■各2,800円+税(発行:富士教育出版社)

全国有名書店、Amazon、中学受験グノーブルの各校舎で絶賛発売中!

難関中合格シリーズ 単元別対策

難関中入試問題の頻出単元に的をしぼった問題集!
頻出単元・苦手単元を克服し、自信を持って入試に挑む!



単元別対策④ よく出る 場合の数 60題 最新刊



単元別対策① よく出る 立体切断 60題



単元別対策② よく出る 2つの変化を追う 60題



単元別対策③ よく出る 工夫の求積 60題

■各1,800円+税(発行:富士教育出版社)

全国有名書店、Amazon、中学受験グノーブルの各校舎で絶賛発売中!

G脳-ワークアウト

中学受験算数を基礎から入試まで無理なく学べる問題集
受験算数の全単元を網羅!

4・5年生版
各30タイトル
6年生版
各20タイトル

■5冊1セット 4,000円+税



一緒にがんばろう

Amazon、中学受験グノーブルの各校舎で絶賛発売中!



グノキッズにベビー、3歳、小学3・4年生コース追加

感動すら覚える子どもたちの吸収力 1クラス2名の先生たちのやり取りを通して 自然に身につく英語力・コミュニケーション能力

2013年11月にスタートした英会話教室「グノキッズ」。14年3月から、従来の4歳から小学2年生までのクラスに、3歳コースと3・4年生コースが、さらに10月からはベビーコースも加わりました。そこで、リサ先生に、子どもたちが英語を学んでいる様子と、グノキッズがこれからどのような英会話教室をめざしていくのかを聞きました。



リサ先生

—2013年11月にスタートしてから1年。手応えはいかがですか。

リサ 実際にレッスンを始める前までは、初めて英語に触れる子どもたちにとって少し難しいかもしれないという思いを抱いていたのです。でも、それは杞憂でした。というのも、最初の8週間を経験した子どもたちの英語の吸収力は、非常に高かったからです。感動すら覚えました。保護者の方からも、8週間でこんなに英語を話すようになるとは思わなかったという感想をいただきました。

—どのようなレッスンを行ったことが子どもたちの会話力を引き出したのでしょうか。

リサ グノキッズでは1クラスに先生が2名いる点が大きいと思います。もともと私は、先生1人が英語を教えることに大きな限界を感じていました。先生1人の場合のレッスンは、そのほとんどが簡単な質問とその回答の繰り返しになってしまい、自然な英会話とは程遠いものになっています。しかしクラスに先生が2人いることで、子どもたちは本当の英語の受け答えを直接見聞きすることができるようになります。この効果は絶大です。2歳から小4まで例外なく驚くほど早く、自然な英語のコミュニケーションができるようになってきているのは、ここにポイントがあると思います。

—予習のようなこともやるのですか。

リサ 言葉を覚えるためには、何度も繰り返し練習することも大切です。教室に通っただけで、英語を話したり聞いたりできるようになるわけではありません。家でビデオを見て、教室で先生と一緒に英語を体験し、翌週も同じ単語を使って別のフレーズを聞いたり、口に出したりを繰り返すことで、子どもたちは自然に英語を身につ



毎週のホームワークを動画で配信しています

けていきます。

—ビデオはどのようなものですか。

リサ 構成は私たちが考えます。つまり、ビデオもプリントもすべて「グノキッズ」のオリジナルです。大学で演劇を学んだ先生が、アレックスという名前のパペット(人形)と一緒に、英語を話すのです。表情豊かに、子どもたちが飽きないように演出しています。子どもたちがビデオを食い入るように見ているので、映像の力はすごいとあらためて感じています。子どもたちがより興味をもつように、ビデオをもっと進化させていきたいと思っています。

—グノキッズは、PBL(Project Based Learning)の学習法を取り入れています。

リサ PBLは、アメリカで生まれた学習方法です。一つの「プロジェクト」を設定し、レッスンを通して作り上げていくことをコンセプトにしています。さまざまなプロジェクトを、クラスのみならず先生で行うことを通して、英語でのコミュニケーション能力も培われます。

—レッスン中の話す速さはどれくらいですか。



先生が2人いるので、2人のやり取りを見ながらレッスンを進めることができるのがグノキッズの特色です

リサ 普通の速さです。大人は文字から単語を覚えるので、最初はゆっくりしたスピードで聞いた方が覚えやすいと思うのですが、子どもはそうではありません。子どもはゆっくりしゃべっても、速くしゃべっても単語が分かりませんから、私たちが普通に会話しているように、子どもたちに接しています。

—3月から、3歳コースと3・4年生コースが、また10月からはベビーコースも始まりますね。

リサ 保護者の方から、自分の子の年齢に合ったコースはありますかと、たくさんのお問い合わせをいただきました。多くの子どもたちが長く通える教室にしたいと思っています。

—レッスン内容は変わりますか。

リサ 基本的に大きく変わることはありません。もちろん、設定する「プロジェクト」や進め方に関しては、年齢に合わせていきます。今後は、キャンプなどのイベントも企画して、子どもたちが楽しめるレッスンを作りたいと思っています。私たち先生は、皆子どもが大好きなのです。子どもたちと一緒に英語を楽しみ、私たち自身も進化していきたいなと思っています。



子どもたちが興味をもって英語の学習ができるように、カードやおもちゃを使って楽しく学習していきます

世界に羽ばたく生徒たちの
「知の力」を育むために

Gnoble Group English Development Training

つい数年前までは、「言葉の壁が国境になる」などと言われ、問題視されながらも、日本人は英語力の向上を図ることができませんでした。ところが今、私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。

多くの企業がグローバル化を宣言し、大学はそれに対応し得るグローバル人材の育成に力を入れ始めており、英語はもはや、一部の職業に求められる特殊能力ではなくなりつつあります。

こうした現状に先駆けて、大学受験グノーブルでは、先進のカリキュラムと精選された教材で、大学受験を超えたところに目標を置き、生徒たちの英語指導を行ってきた実績を持っています。この実績を踏まえてグノーブル・グループでは、より高次の「知の力」を職員一人ひとりが備えることで、激変する世界に羽ばたいていき、そこで活躍できる生徒たちをより早くから育むことを主眼に置いた取り組みとして「グループ内英語研修会」を開始しています。

(取材・文 吉村高廣)

世界の教育事情やビジネストレンドを英語で知る

この英語研修会の第一の目的は、多くの企業で研修実績を持つグノーブル・グループの職員、リック・コルビー先生からのレクチャーにより、世界の教育事情やビジネストレンドを知ろうというもの。第1回目は、OECD(経済協力開発機構)加盟国を中心に、3年ごとに実施される15歳児の学習到達度調査『PISA(Programme for International Student Assessment)』に着目し、世界の中で、いま日本の子どもたちの学びがどのような状況にあるかをテーマとしました。

研修会の対象は、グノーブル・グループすべての職員、それは、英語科の職員のみならず、他教科の職員、さらには受付や経理を担当する事務職員にまで及び、すべての職員が自ら学ぶことで、組織としても強くなり、生徒一人ひとりの成長により力強く貢献できることを目指しています。

研修会では一切日本語は使いません。もちろんすべての職員が英語に明るいわけではなく、学校を出てしま

く英語と接点を持っていない方も大勢います。したがって、一つの単語であっても日本人が分かりやすい言葉に置き換えるなど、表現の仕方にも工夫をしました。とはいえ、どこかに日本語を入れるとかアニメーションを入れることはせず、「あっ、なんとなく言っていることが分かる!」という感覚を味わっていただけるようなカリキュラム構成を心掛けました。

ベクトルを共有し前進の糧とする

グノーブルでは、「知の力を活かせる人に!」という強烈なメッセージを発信しています。このスローガンの裏側には、「そのように生徒たちを導いていきます」という思いが込められています。であるならば、まず私たち自身が知の力を活かせる人でなくてはならない、あるいは、そうあるよう日々努力をしていくのは当然のことです。

私たちはよく、生徒や保護者の皆さまに、「本当の意味で学力を伸ばすためには、自発的に勉強に取り組む姿勢を見せることが肝心です」と申し上げます。そうした主体性が、ゆくゆくは生徒たちの知の力につながってい



くのも事実です。それは私たちにも同じことが言えます。本当の意味で子どもたちから信頼される力を育もうとするならば、毎日忙しいのは当然のこととして、新たな知的財産発掘への主体的な取り組みが欠かせません。

そしてそれは、グループ全体のスローガンとして「知の力」を標榜する以上、生徒の前に立つ先生方だけでなく、すべての職員の方々がベクトルを共有し、激変する教育環境に対応できる力を備えて前進してゆくことが肝心です。そのために、「改めて英語に取り組んでみる」ことを通して、自ら研鑽を図ろうという試みでもあるのです。

世界で活躍する「人財」と向き合うために

グノーブルでは、「中学受験と大学受験との連携、新しい一貫教育」を謳っているわけですが、それをセールストークの言葉だけで終わらせるのではなく、職員たちが体現していかなければ保護者の皆さまには伝わらないと思います。

「一貫した教育」というのは誰でも言えることです。ただ、それについて「どんな一貫性があるのか」とか「どう機能するのか」といった本質を、より良い形で具現化させていかなければ、それはかけ声だけの「一貫教育」であり、生徒や保護者の皆さまを裏切ることになってしまいます。

おそらく、グノーブルで出会う生徒たちは、間違いなく将来、世界中に活躍の場を広げていく「人財」に違いありません。そうした生徒たちに出会える自分をどれだけ喜べるか、また、そうした生徒たちにどれだけ自分が役立てるか、そういったことを突き詰めて考えれば、自発的に自らを磨く努力をすること、また塾として、そうした機会を用意することは当たり前のことと言えるでしょう。

足並みを揃えて子どもたちをサポートする

さらに、この研修を通じて期待できる効果は、大学受験と中学受験、それぞれの職員が垣根を越えて、月に一度、小さなコミュニケーションを持てる場づくりです。そうした中で、人材交流がスムーズに行われるようになり、情報交換が行われ、グループ内に一体感が生まれることが理想です。

もちろん、大学受験と中学受験、それぞれに立ち位置の違うスタッフが一緒に仕事をやるようになれば、さまざまな意見が出てくるようになるでしょう。ただそれは普通の企業なら当たり前のことですし、その相乗効果によって企業は成長していくものです。

ところが、こと進学塾や予備校というのは、一つの企業体として動くのではなく、先生一人個人のパーソナリティが尊重される傾向にあります。もちろん、それはそれで良い面もあるのです。でも、一匹狼的に専門性を高めていくだけでは、一貫教育とは言えないというところに私たちは行き着きました。だからこそこうした場を用意して、グループとしての推進力を高めていくことが大事なのです。

人間形成の根本からお手伝いできる力を

10月からは、グループとして英会話グノキッズのベビーから大学受験までのお子さんをお預かりするようになるわけです。これはもう、壮大な人間形成に関わることになるわけで、受験が終わったら、「これから頑張るね」で終りにすることは必然的にできなくなります。

それに加えて、「弱点の克服だけ」とか「この学校の受験に向けて」といった指導では済まなくなっていくはず。受験だけに活きる近視眼的な指導ではなく、子どもたちを社会の財産として捉え、人間形成の根本的な部分からお手伝いできるような力が、これからのグノーブルには求められます。そしてその力を養うことこそが、今の私たちに課せられたミッションです。

これからのグノーブルは、他の受験塾とはますます一線を画していくことになるでしょう。さまざまな「学び」を通して、将来子どもたちが、どのような社会でも強く生き抜くための土台を作り、世界中で活躍できる「知の力」を磨く場所となるはず。だからこそ、私たち職員もより高次の「知の力」を追求し、生徒と向き合うに相応しい力を備えていくことが必要。この英語研究会は、その序章に過ぎません。

*Gnotubeで英語研修会の一部をご覧いただけます。
URL:http://www.gnoble.com/gtube/gt_engdevelop.html

冬期講習

12/26~29・1/4・5

6年生：13:30～19:00(算・国・理・社)
 5年生：13:30～17:30(算・国・理・社)
 4年生：9:00～12:00(算・国・理・社)
 3年生：9:00～10:30(算)
 2年生：10:45～12:00(算)

正月特訓

12/30・31・1/2・3

6年生対象
 9:00～16:40
 (算・国・理・社)



Gnoble

中学受験 グノーブル

※6年生の講習・特訓のみ東京・自由が丘・吉祥寺校での開講となります。
 東京・自由が丘・成城学園・西船橋・白金高輪・吉祥寺
www.gno-jr.com 詳細はHPまたは0120-64-2013まで

冬期講習日程

対象

中1～高3・既卒生

冬期講習に関するお問い合わせ 03-5371-5487

Aターム **12/22**(月)～**12/25**(木)

Bターム **12/27**(土)～**12/30**(火)

Cターム **1/4**(日)～**1/7**(水)

2014年 大学受験合格実績 8期生 在籍426名

東大各科類69名

理科I類 24名
 理科II類 11名
 理科III類 3名
 文科I類 14名
 文科II類 7名
 文科III類 10名

東京大

69名

国公立慶医

52名

医学部医学科149名

東京医科歯科大(医) 2名
 東北大(医) 3名
 千葉大(医) 6名
 筑波大(医) 3名
 横浜市立大(医) 1名^他
 ※国公立大医計44名

国公立大199名

京都大 8名
 一橋大 23名
 東工大 10名
 東大 12名^他

慶應大

217名

早稲田大

211名

上智大

93名

慶應大(医) 8名
 東京慈恵医大(医) 16名
 順天堂大(医) 10名
 日本医大(医) 11名
 昭和医大(医) 11名^他
 ※私立大医計105名

新宿本館 〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3
 新宿GSビル1F
 アクセス:JR新宿 サザンテラス口 徒歩1分(南口徒歩2分)
 JR代々木 北口 徒歩5分
 京王新線・都営新宿線・都営大江戸線 出口2 徒歩0分

渋谷本館 〒150-0002 渋谷区渋谷1-7-6
 青山CRビル1F
 アクセス:JR渋谷 宮益坂口 徒歩5分・東京メトロ渋谷 11番出口 徒歩4分
 「渋谷ヒカリエ」青山通り方面出口 徒歩1分

お茶の水本館 〒101-0062 千代田区神田駿河台2-5-5
 村田ビルディング3F(1Fスターバックスコーヒー)
 アクセス:JR御茶ノ水 御茶ノ水橋口 徒歩2分・東京メトロ御茶ノ水 徒歩3分
 東京メトロ新御茶ノ水 B1出口 徒歩4分

大学受験グノーブル事務局【新宿本館・受付】

お問い合わせ | 月曜～金曜15:30～21:00/土曜14:00～21:00/日曜休館(説明会・テスト日除く)
 〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

TEL **03-5371-5487**
 FAX **03-5371-5488**

2014年度 開講科目【中1・2・3】英・数【高1】英・数・古【高2】英・数・物・現・古【大学受験生・高3・既卒】英・数・物・国・小論

— 知の力を活かせる人に —



Gnoble

大学受験 グノーブル

新宿・渋谷・お茶の水

www.gnoble.co.jp

グノーブル総合案内 www.gnoble.com



Gnoble

GROUP

知の力を活かせる人に
www.gnoble.com

私たちは、将来にわたって活躍できる土台となる
 有機的知識・思考力・判断力・コミュニケーション能力・心の強さを
 身につけていくことを常に念頭に置いた指導をお約束します。

Gnoble
 大学受験 グノーブル

Gnoble
 中学受験 グノーブル

GnoLink
 個別指導 グリリンク

GnoKids
 英会話 グキッズ